

女鑑

明治二十八年六月二十日發兌

第八十八號

東京國光社

女鑑第八十八號目次

宇品丸遭難の圖



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす(四)

(ほ) 風俗上の事務

婦人の形樣、閑雅にして、其の習俗の高潔なるは、坤上乾下、特に、我が大日本國のみといふべし。

支那の風俗、好し、男女の際を愼重にするが如きは、美風と謂ふに足れり。然れども、一般、婦女の、其の足を緊縮し、或は、耳環を着けて、好むで不具の身となる等は、野蠻の所爲にして、決して、賞すべきにあらざるなり。朝鮮の婦人の如きも、尚、未開の風を帯び、萬事、幼稚の域に居れども、男女の事を

輕く視ずして、重ずるに至りては、亦、殆、他の外國の及ばざる所なり。苟、此等の風俗、善く、之を培養して、漸次、進歩發達せしめば、其の國、何ぞ、必しも、永く振はざるを憂へむや。

抑、東洋に於いて、國といふ國を爲して、西洋の邦に對して、衡を爭ひつべきものは、固より、無論、日支朝三國の外に在らず。而して、三國、元、純然たる同種族文物の國たるよりは、是、其の、倶に、自重して、互に相和すべきこと、特に、必要とせざるを得ず。彼の過般の事の如きも、萬一、交渉、其の度に過ぎ、紛糾、永く解けず、彼此、各、力憊れ、勢乏きに及びては、鷸蚌、兩ら、他の僥倖者の漁利たるを保しがたからむ。天下危險の事、此れより甚しきはあらずして、而して、今後、最、警戒すべきもの亦、此に過ぎたるはなし。

今や、皇軍は次を以て、各、凱旋の途に就けり。萬里の異域に殊勳を樹て、白日錦衣して故郷に歸るは、眞に、天下の榮にして、古今の譽とすべきなり。然れども、此の榮譽は、事實眞箇の名譽なる耶。國家の權理面目を、萬古千秋に繫維するの、美事偉擧と謂ふべき乎。……吾人は、尙、此の外に、別に眞名譽あるを信ず。吾人は、更に、他に、國家、眞の權理面目を、繫維すべき、美擧偉行あるを知る。……三億圓の償を得るは、未曾有の事とても、之が爲に、狂喜して踴躍するに足らざるなり。何爲れぞ、遽に、微利小功に泥みて、而も、輕輕、自づから足れりとするに忍びむや。

歸朝軍人の、都下の各所に宿泊する者、其の風紀、極めて整ひ、士卒、皆方正溫和、毫も、誇大の風を見ず、放暴の行を聞かず。實際、至りて平穩に、各家、

皆肅然として、宛も在らざるものゝ如し。俗謡俚歌の變を見ず、人心世情の遷を知らず、市井の狀、常の如く、毫も、平日に殊ならず。是、實に、稀有の美風にして、無比の盛典といふに足る。蓋、古の名將の、兵を養ふもの、多くは此の如し。

然るに、軍人の品行、此の如く平穩なる所以のものは何ぞや、即、兵としては、義勇奉公を、肝に銘し、將としては、忝なくも、大元帥陛下を戴き奉り、拮据盡忠、能く、其の才幹を展ることを得たるに依ると雖、必竟は、各家人の内助、各、與りて大効ありし故なりとせざるを得ず。各新聞の報告中、出征軍人家族の美風を載することゝ、特に、夥多なるを以てすれば、是、其の家庭、平時の素養、果して、偶然ならざるものあることをも、察知するに難からず。且、夫、畏

き御邊を始め奉り、顯著なる貴人の婦女子、其の他、一般婦人の有志篤行なるもの、開戰以降、萬事に黽勉として、誠意を効し、赤悃を表せしこと、決して、少きに非さるは、世人の、夙に知りて、深く感する所にして、議會が、一瞬間に、數千萬圓の軍資を議決せしも、實は、他なし、彼等婦人が、奮發の結果なるのみ。すべて內に、良妻なきものは、外に、思はぬ不覺あり。風俗維持改善の上に就いて、淑女を要するは、此の故のみ。吾人は、世の篤行の諸婦人を、深く敬愛すると同時に、自今而后、諸婦人の、益〻拮据して、勤儉着實の化を施し、以て、國民、就中、軍人をして、愈〻、其の肅肅たる風紀を整へ、整整たる規律を正し、以て、支那、朝鮮をも率勵すべきのみならず、廣く宇內諸國をして、永く矜式せしむべき規模を立てんを望むなり。

論説

日本婦人の帯の幅

宮地巖夫

今日の日本婦人の帯の幅は。頗る廣きものにて。常に見なれたる吾人四千万の同胞には。何とも奇しむことなく。是れこそ我國の風俗にて。千万年の往古より。我國の婦人は。斯る幅廣き帯をしめ來れるものなれと。思ふ人の多かる如くなれども。其は誠に風俗の沿革に心つかざるひがことにて。畢竟歷史に闇き故の誤たるを免かれざるべし。抑日本婦人の帯の幅の廣くなりしは。今より凡貳百年ばかり前よりのことにて。其以前に在りては。後世に至りて。斯る帯を婦人の用ゆることゝならむとは。蓋し夢にだに見ざりし所なるべし。其は落穂

集巻の一に。我等若き頃までの女中帯と申すは。蔦の巻物類をば。三ッ割に致し。絹羽二重の類は。二ッ割と相定たる如くこれ有り。就中高田様懸りと申ス候は。右の三ッ割を又三分狹にくけ。其端を結び押込候て。差置申す如くこれ有り候處に。四十年ばかり以前より。巻物類を二ッ割。絹類は一巾を其儘に用ゐ。後の結びめ抔をも。夥しく大きに致さずしては。叶はざる如く成され候と存候とあり。此落穗集と云ふ書は。中御門院天皇の享保十年を以て。大道寺の知足軒友山と云へるが。九拾歳の時編輯ルたるものにて。此享保十三年より四十年前に溯る時は。東山院天皇の元祿二年に當れば、其頃よりの事と見えたり。此元祿二年より本年卽ち此明治廿八年に至りて。二百七年となるなり。是にて婦人帯の廣くなりし時代を知るべし。然れど斯の如く婦人帯の幅の廣く

なりしは。専ら武家以下にての。風俗の沿革にこそあれ。猶九重の雲上にまでは。及ばざりしと見えて。宮中にては今にも。然る幅廣き帯をば用ゐらるることと有ること無し。是にても。其の武家以下のことなりしを知るべし。

社會の根本

大町桂月

亭々として雲を衝くの古檜、蓊鬱として十里蔭を布くの老松、人は唯、其幹の大にして、其枝葉の繁きを見る。然れども、何ぞ知らむ、其根の、深く九泉の下に至れることを。蓋、根有て、而る後、幹あり、枝あり、葉あり、花あり、實あり。根は地下に在て、人の目に觸れずと雖、根の發達と共に、幹以上は發達し、幹以上の發達と共に、根も亦發達する者なり。即、根の發達と幹以上の發

達とは、相伴うて離れざる者なり。若、幹以上のみ發達して、根の發達せざる時は、啻に養液を得ざるのみならず、一風一雨、且、自支ふること能はずして、忽地に倒れむとす。樹木を培養せむとする者、心を其根に注がざるべからざる也。

是、獨、樹木のみならず、万事皆然るを見るなり。彼の西洋崇拜の風上下に彌滿し、歐米皮相の文化を採て、我國家の體面を粧はむとせし際に方り、吾人が慨然起て國體を唱へしもの、決して國家の進歩を嫌ふにあらず、根底なきの文化は、徒に國家の衰亡を招くのみにて、到底、國家の眞の發達を圖る所以にあらざることを確信したればなり。

國家の根は何ぞや。曰く、國體なり。國體を本として而る後、文物制度、之に

同化し、之に順應し、之に適合して、始て國家の眞の發達を期すべし。彼等西洋崇拜の徒は、國體を閑却して、奇怪なる文物制度を傳へんとしたる也。枝葉花實に眩して、其根あることを忘れたる也。根なき樹木の、忽ち自倒れむとするをも知らざりし也。

樹木は根ありて始て生長し、國家は國體の上に立て始て隆興する也、更に細き觀察を下すに、國家外面物質的の進歩は、內面人心の進歩に基づく也。即、國民精神まづ完全の域に進みて、國家富强の實、始て其極に達する也。富國强兵は枝葉也、花實也、而して國民の精神は根也。

更に又、一歩進みて論ぜむに、國家の分子は家庭也。完全なる家庭ありて、而る後、完全なる社會あり。社會の改善を圖らむと欲せば、先、家庭の改善を圖

らざるべからず。家庭は根也。而して、社會若くは國家は枝葉也、花實也、重く、且大なるを知る也。父が櫻井驛に寶刀を授けての遺訓と、母が自殺せんとせし手を抑へての教戒とは、未だ孰れか最能く小楠公の忠義の心を鼓舞するに影響ありや否やを知らず、脊後に創を負うて歸るなと戒めし母ありて、强勇無双なるスパルタの武士は出でたりし也。

余は是に於て、女子教育の一日も忽にすべからざるを知り、女子の責任の、益、

余は今回の日清戰爭を見て、始めて日本魂の未だ銷磨せざるを喜び、且つ其根底の深くして堅きを喜ばずんばあらず、今回の戰爭に於て、日本武士の花は咲けり。而して之れが根となるものは、豈に平生の素養にあらずや。既にスパルタ武士あり、猶スパルタの母なしといふものは、余、信ぜざる也。

一擧して支那に勝てり。是れ日本國が世界の競爭場裡に上らむとする門出の血祭也。而して前途の極はめて遼遠なるを思へば、決して小成に安んずべからず。然れども、心旺し、氣激するの餘、當時の急務は強兵也、富強也、軍艦の製造也、兵器の改善也とて、家庭教育、女子教育などを度外に付して、顧みざるものあらば、是れ素養の必要なるを知らざる者也、樹木に幹ありて根あるを知らざる近眼者流たるを免れず、余、國家の爲に、太だ、取らざる也。

無聲の哭泣を聽んことを要す

坂本三七郎

九天の上には、凱歌高く起りて、歡聲四海に滿つ。然れども、何ぞ退て、九地の下に、酸鼻すべき哭泣の、悲聲あるを聽ずや。征清の役も、今や殆んと年

を經て、漸く終を告げ、國光海外に伸びて、威は四方に敷く。凱旋門を築て、忠勇なる將士を迎ふ。臣民たる者は、何ぞ千歲一事の、戰勝を慶賀せざらんや。然れども、吾人は一方に向て、之を賀するの情切なりと雖、亦一方に於ては、哭泣の聲、實に悲しむべきを思はざるべからず。吾人は、寧、讀者諸孃か、九地の底下、悲泣絕んとするの人を思ふの情多からんことを願ふ者なり。四十万の將士、海を渡りて、異域寒暑の野に鬪ひ、幾度か生死の途に出入し、以て始て今日の大功あり。而して其の忠勇將士の中、屍を原野に曝し、異域の鬼となりたる者、其又幾何なるを知らず。是等の忠魂義魄は、實に是れ、今日の國光宣揚の、熱血なるを知らずや。是等將士の忠義を思はゞ、其の父母妻子の如何に悲しむべきかを知らざるべからず。夜來、紅閨の中、獨臥征夫を慕ひ、朝に去て

祠畔に詣り、衆中不敢分明語、暗投金錢卜遠人、の情に堪へざる貞婦幾人なるを知らず。然るに、何ぞ圖らん、可憐無定河邊骨。尙是翠閨夢裡人。となりて、空しく夢寐に良夫を戀ふの人とならんとは、腕を約するの黃金暖なるも、尙歸來を待の時あり。此等の貞婦節女は、果誰をか待たん、孤兒母に添ふて父の事を問ふ、慈母、膝下に兒を擁して、父君か討死義烈の情を說き、以て兒を激し、己を慰すると雖、其の眞情を察し來れば、吾人は、夜來感極まり、枕頭の沾ふを覺えず。而して旋凱の大功を聞く每に、更に淚の多きに勝へず。嚮に、夫を勵まして門に送るの時、萬死を期すると雖、然れども、尙萬一の生を賴むは、是れ婦人女子の通情なり。嗚呼、今や遺髮門內に來つて、門外には、凱歌吹奏の樂を聞く、心腸百斷。家中の天地は、悲風慘憺、吾人は讀者諸孃か、此の悲風

慘雨を諦視せんことを欲す。

國の爲に身を殉ふ、夫は義士たり、婦は貞婦たり、國家干城の妻たる、其の身に於て悔ゆる所なしと雖、私情より之を觀れば、夫婦相愛の切なる、望夫山頭、化石せざる者は幾んど稀なり。吾人、近頃某軍港に在り、戰艦餘威を帶て、港内に來るあり、吾人往て之を見る、砲丸艦側を貫て、碧血の痕、尚存す。阜頭、將士の妻女來つて夫君を待つあり、嗚呼、此の良妻賢婦の中、夫君來らず、空しく舊故の知人に逢はゞ、萬望絶えて狂せんとする者あらんかと、殆んど正視するに堪へざらしむ。嗚呼、吾人をして、徒に婦女子の痴情を説くと謂ふ勿れ是等の情は至情なり誠意なり、良妻賢婦が夫を慕ふ、此の如き切情あるが爲に曩に、夫を勵まして之を送り、良婦義に殉して身を顧ず、以て能く大勝を得

たるを知れ、悲しむべきも此の良婦なり、賴むべきも是等の貞婦なり。讀者諸孃よ、徒に翠帳紅閨の中、戰勝を喜んで、空しく功を稱するに止まる勿れ、進で、近隣戰死者の、寡婦孤兒あらば、之を敬し、之を慰めよ、之を敬し之を慰むるに於て、國家今日ある所以を考へて、之を愛撫敬慰せよ。吾人、玆に一策あり、讀者諸孃、願くは凱旋の擧を賀すると同時に、一の慈善會を開き、其の價を以て、天下戰死者の遺屬を慰めんこと是なり。吾人は屢々、貴女令孃が、慈善會なる者を起すを聞く、然れども其の實際に於ては、吾人甚之を喜ばず、何となれば、其の事の遊戲に出づればなり。其の志の他にあればなり、若、寡婦幼兒を慰愛せんが爲に、慈善會を開かば、美なるを願はず、華なるを欲せず、只至情に出でよ、誠意に行へ、至情誠意、寡婦貞妻、泣て孃等の賜を拜受せん、

男子外に在て、忠魂義魄を慰するに狂奔す、何ぞ、孃等、一家經理の餘暇、同胞姉妹と敬謝するの美擧を爲さざるや。仰て國の爲に大賀し、俯て貞婦良妻の情を思ひ、一掬の涙、是を女鑑讀者の諸孃と與にせんと欲し、敢て之を寄す。

史談

やす女

大町桂月

水戸黄門光國公は、近世の明主におはせり。天下の名儒を延き、國用の三分一を費して、大日本史の編纂に從事し、以て大義名分を明にしたまひしいさをしは言ふも更なり。能く國を治め、俗を化し、淫祠をこぼち、窮民を憐れみたまふなど、すぐれたる行ども、悉く數ふるに遑あらず。一日、那珂郡野上村を通らせたまひけるに、年未だ若く、しかも顏色醜からぬ一人の女の、やれたる衣着て、いと苦しげに田を耕すを、遙に望見たまひて、いたはしき者の有樣や、彼女は舅の呵責の爲にや、

はた、姑の邪見の爲にや、婦柔き女の身にして、獨り田を耕すは、いぶかしきことの限りなり。召し出して、其故を問へと、情ある君の言葉に、近臣かしこまりて、その身の上を問ひたゞすに、果して公の目鑑にたがはず、故ある女にして、げに、感ずるに餘りある貞婦、やす女といふものなりけり。

やす女は、常陸國那珂郡野上村の農夫、與二右衛門といふ者の妻なり。その心、その姿、共に淸らかなる女なるに、與二右衛門もまた、農夫としてはすぐれたる人柄なりけれど、一村擧りて、その良緣を羨みけるも、思へど一炊の夢なれや。いくほどもなく與二右衛門は、楊梅瘡といふ惡病にかゝり、面の皮くされたゞれて、また、昔の俤なく、膿汁常にわきて、臭氣堪へがたき不具者となりけるに、やす女は、つゆ厭ふ氣色なく、何くれと看病して夫を敬ふこと、前にもまさりて、いと、まめやかに事へけり。

與二右衛門、心苦しく思ひて、やす女に云ひけらく、御身は年なほ若く、姿も十人並にすぐれたり。さるに、我の如き不具者の妻となりて、一生を終らむは、まことにいたましきことになむ。且つ、左團扇と世俗にもいふ通り、子の爲めに老後の眠

をやすらかにするは、なべての世の人の習にて、とりわけて、女子の老後の樂は、その子にたよるより外なきに、御身、我許にありては、最早子を生ぬよしもなく、所詮行末のつまらぬことのみなれど、此迄の事は、果敢なき夢とあきらめて、一日も早く我家を去り、良き夫を求めて一生を託すべし、我は之を恨まぬのみか、反て心易く思ふなり、とさとしけるに、やす女は聞きも終らず、忽ちわつとばかり泣き出し、情なや、我夫、此年頃かしづきまゐらせたるに、猶、妾をば、かゝる水臭き女とおぼしたまひてか、世の中に、夫といふものは、御身の外にはなきものを、今更に御身をすてゝ、何處にかゆかれ侍るべき。まして、御身には、兩柱の親御のおはせるを、病にかゝりたまへば御身一人の力にては、侍養をつくし得らるべくもあらず、妾はあくまでも、もとの如くかしづきまゐらせむに、御身も、もとの如く妾を御身の側にはべらせて、兩親への侍養、云へば更なり、御身の看病も、心のかぎり、つくさせたまへや。離縁などゝは、聞くも、けがらはし、噫にも出したまふなとて、つゆ從はむ氣色はなかりき。

與二右衛門は、その心を汲みて、かくまでに、癈人なる我身を思ふかと思へど、う

れしさ、かなしさ、胸にあまりて、熱涙はやまぶたに傳りけれども、心弱くては、かなはじとて、わざと、聲をあらゝげ、こや〳〵、よくも聞きわけよ、夫の言葉をいなむは、貞女にあらず、我側に居て我を苦しむるは、我を愛するにはあらで、なかなかに我仇なり、我妻にもあらず、とく〳〵去りねと怒りけれども、やす女はあるにもあられず、唯頭を袖に埋めて、よゝとばかり泣き沈みけるが、何思ひけむ、傍なる利鎌、手にとりて、はや自害せむとす。與二右衛門は仰天し、その手にとりすがりて、しばらく待てと呼べど、やす女は、聞かず、いや〳〵、死なしてたまはれ、此世にて、愈御身に添はれぬことならば、生きて、何かは爲む。御身のつかひならし給ひし此鎌にかゝりて、死ぬが、せめての本望、その手はなして〳〵とて、固く決心せるさま、此世の人の心とは思はれず、久方の天つ乙女の、假に此世に天降り、温かき情の露の凝りて、その胸を充たすにはあらぬかと思はるゝばかりなるに、與二右衛門は感歎のあまり、男泣きに泣きて、あやまりぬ〳〵、唯御身の爲をのみ思ひて、心にもあらぬことを言ひたれど、あきもあかれもせぬ御身の、かくまでに決心せるを、いかでかつれなくもてなすべき、やよや、よく聞け、二世かけて、御身は我

妻なるぞや。此不具者の看病、兩親の介抱賴み入るとて、過言を謝しけるに、やす女は漸く頭をあげ　夫の手にすがり　いと嬉しげに腐れ爛れたる顏を見上げて、涙より外には、言葉もなかりき。

雨ふりて地かたまるの譬、此爭ありてより、やす女は夫の我を思ふ心の深きを感ずれど、與二右衛門もまたやす女の我を愛する心の堅くして、動かすべからざるを喜び、夫婦の情、益濃やかになりけるが、唯如何ともする能はざるは、一家の零落することなり。與二右衛門の家、もと富めるにあらざるに、年頃、病に伏して、働くこと能はざれど、田園あれて、畑ども時を得顏に荒れまはり、貯蓄やうやく盡きて、一家四口、餓死に瀕せむどかりなれど、やす女、遂に夫に代りて鍬を執り、鋤を用ゐ、火耕水耨、繊弱なる身を風雨にさらし、骨を碎き、心を竭して、以て一家の生計を支へけるが、桃李言はずして、下自から蹊をなす、天道いかでか善に與みせざらむ。やす女は、やがて、常陸の國主光圀公の勸賞にあづかり、多くの黄金をたまはり、田園の租税は免せられ、閭里に旌表せられて、大に面目を施しけるとかや。あはれ、光圀公の慈愛の心の半分なりとも、今の紳士なる者にあらまほし、而し

して、いやす女の貞操に對して、爲に慚色あるもの、當代なは少なからざるを見るなり。

玉苗（前號につゞく）

大隈松子

さても、玉苗は、夫の委細物語に、感涙せきあへず、暫時は、答へもなかりしが、稍有りて涙を拂ひ、扨も〳〵、母御の恩愛ぞ、世に有難く尊けれ。それにも増して我夫の孝行の御心は、又類ひなく御座すかな。誠、我夫の宣ふ如く、今夫婦が幾若干作業に勉むとも、此の許多の銀を得むことは難くなむ。妾此の銀の調ふまでは、何年まで獨寐るとても、少しも厭はず侍れど、我夫は、心して業を營み、一日も早く、母御の身を、安らかに爲さしめ給へ。是勘心の務にて、一生の願に侍りと、他事なくぞ聞へける。傳三打頷き、然なり、我元より爾思へり、なれども此銀返さぬ中は、我心決して變せず。其方、年頃の身を以て、由なき我に連添ふて、可惜月日を徒に過さむは、益なきことなり。今より家に歸り、別に夫を撰むぞ宜き。我れは少しも恨みじと云ふ。玉苗頭打掉り、妾不肖には侍れども、一度嫁して後、いかで

かは他心を存ずべき。臣は二君に仕へず。女は兩夫に見へずとかや。況てや孝行の我夫を棄て、阿容々々と家に歸らむ、天の咎、人の譏、中々に憚多し。只何時までも、妾と呼びて、朝夕側に置きたまはゞ、此上なき妾が幸に侍りと。悃切に勇め勵まし。即て我家に行きて、母に始終を語りしに、母は、殆信とせず、父喜內も疑ひて、躊躇在りしを、玉苗の伯父文內、熟々聞いて感に堪ゐ、實に、我曾て其の近隣の人々に聞けることあり。傳三は、日頃母に對して、至極孝行の者なりと。されど、今玉苗が語りしも、必定僞飾にはあるべからず。如何にもして彼を助け、早く其の志を遂げしむるこそ善けれといふ。されど喜內も、貧乏なれど、如何ともすべからず。思案に沈み居りけるに、文內頻りに感激し、傳三は、孝子なり。我姪は、貞女なり。天道何ぞ此の者共を、永く困究せしむべきや、必後榮あるべし。我決して默過せずとて、即時に、田畠を賣り、直に三百兩の銀を調へ。玉苗に渡せしかば、玉苗歡喜踊躍し、天にも上る心地して、急ぎ夫の家に還りしに、折柄傳三は不在なりければ、玉苗銀を袋のまゝ、座敷の机の上に置き、身は、臺所の方に行き、其日の用を爲し居たり。此に、此家の近隣は、小熊隆閑といふ小人あり。常に惡事を業として、人

の患を喜べり。此者不斗壁の際より、件の事の体を闘見て、即て密に忍び入り、彼の銀を盗取り、逸早く跡を晦ませり。かくとも知らず、傳三は、暫時ありて、歸り來しかば、玉苗は、心嬉しく速く彼銀を與へて、喜ぶ顔を見むやと、急ぎ坐敷に行きて見しに、這は如何に、影もなし。驚き大方ならず、慌てしまゝに、夫に問へども、固より知るべくもあらぬことなり。玉苗は、心亂るゝ斗り思惑ひ、種々に考ふれど、只怪しみの増すのみにて、疑ひ霽らす由もなし。傳三も、甚疑ひ、其方が伯父は、家は富まぬに、三百兩の大金を與へたりとは心得ず。察するに、个樣の手段を教へられ、其を言懸にして、縁を切らむの方便ならめ。我は豫々云如く、誓ひて邪の念なし。何れへなりとも心の儘に嫁入るこそ宜かるべきに、如何なれば、謂なき難題を言出すやと、怒と共に罵れば、玉苗も、大に恨み、定て深く契りたまへる女子ありて、妾が銀を持來しを幸に、其女に與へむと、人知れず盗隱して、空惚けしたまふならん。此銀なきときは、妾が本意も立たず。伯父の前も面目なし。又夫に嫌はれて、何の榮かあるべきと、且歎き、且悲しみ、遂に奥に入りて、自ら縊れしに、天道貞婦を捨ざりけむ。索切れて堂と落たる物音、傳三聞て只事ならずと馳付、救ひ

得て恙なく、人々も寄集りて、評議紛々たりけれど、傳三は此に疑の雲晴れて、妻の芳志を深く感じ、是必定人ありて、盗去りしに極まれり。然れども、天道は欺きがたし。不日必手掛あらむと、是より髪を亂し、食を斷ち、一七日間一室に籠りて、神明の冥助を仰ぎ、盗跡露顯を祈りける。應驗過たず、果して二三日の後に及びて、隣家の小熊京都に行くと、知音の家へ立寄りし折しも、少年等打集ひ、酒打飲みて居たりしほどに、小熊も群に入りて、數盃を傾け、醉に任せて怪氣なる菌を喰ひしに、忽に毒に中り、腹痛刺すが如く、心身ともに惱亂して、四苦八苦七顛八倒、悶絶れて人事を知らず、人々甚驚騒ぎ、藥を與へ、腹を温め、胸を摩りて氣を開かせむと、懷を寛げしに、夥多き銀子入れし袋、首に掛て持居しかど、座中一同大に怪しみ、此奴箇樣の銀子あること、近頃不審の至なり。是此頃傳三方にて紛失せしと聞く銀子にはあらざるか。彼は、平生孝行者。是は、日頃不屈奴。爾なり、全く然らむと、小熊の死人同然なるを機會に、人々其の銀を取出して、傳三方に往き見せけるに、玉苗見覺へあれど、驚き且喜び、正しく此に相違なしといふ。傳三神明の冥加を畏み、衆議の上、其筋へ訴へければ、程なく召出され、小熊をも喚出して糺

問ありしが、明白に陳じて、紛るゝ廉もなきに。傳三は、却て口鉗みて、非分の罪を受けむとす。然るに此時玉苗の申立にて、財布の絹と、父喜內が衣服の絹と、同じ物なること判然し、論より證據の推問に、流石の惡棍も分疏しかねて、遂に逐一首伏しけれど、小熊は、乃ち捕はれて、刑律に處せられける。かくありしかど、藤太夫夫婦始、喜內、文內皆傳三の宅に來り、夫婦の孝貞を稱美し。且藤太夫より、金三百兩を傳三に與へしに、固辭して受けず。何如に諭せども、決して肯かず。爾樣に仰せたまはゞ、母を還したまはるべし。我存分に志を勵みて、母の餘年を安せむ。是無邊の御恩ならむといふ。尤至極の願なり、されど、先一應汝の妣に問ふての上の事にすべしと、藤太夫歸りて云々と語りしに、答へていふやうは、妾熟々思ふに、再嫁といふとも、既に嫁したる上は、終身他意なく仕ふべきが、女子たる者の道なるべし。殊に妾懷胎して、今五ヶ月になれり。かたぐ心一にては、何如とも判じがたし。藤太夫曰く、さらば、卿も傳三の方に還り、母は、慈を完うし。子は、孝を果すべし。又出產せば、養育して、成長の後我に還し、我老懷を安うせよ。我先妻を母となして、家の祀を承しむべし。かゝれば、卿が子に、母あり。先夫に、妻

あり。二つながら宜しからむ。如止りて還らずば、子に、母なく。先夫に、妻なし。天の照覽恐れざらむや。將又嚮に、傳三に、金を與へたれども、辭して受けず。依て卿に贈くるなり。二年の間我を助けて、家の事を取治めたる功績は少からず。其に報ふには足らねども、亦只尺寸の表のみと、說示してぞ取らせける。此後親族彌彌和睦し、親交益々厚く、其の風儀いとも美しかりしかば、世に遍く傳聞し、上聞にも達せしほどに、甚く感賞ありて、祿物を賜はり、其家の戸役をさへ免ぜられしとなり。』

(をはり)

家政

いけ花

井上頼文

この四方の薰りといふ書は、未生流のながれを汲める人々が、手術をつくしたる、挿花のかたをこまやかに記したるものなり。されば、挿花を翫ぶ人たちの參考ともなりなんかと、摘みいでつるなり。なほ、本書のなれるゆゑよしと、作者のこころばへとを、明さんとて、浪花の未生家、不濁齋のものせる序文をあげ、次に、

異世能堂濱居のかける、跋文の要領を節録しつ。

老師未生齋の編る、華術三才の巻にも、百箇條の口授をつらね、四季夫々祝ひ日の挿花の作意、明にせちに示し置れしが、口授のみありて、其容儀は未圖に寫れず、予親未生の流れに浴しぬれど、是をもて四方に遊び、折にふれ、人をして、此道を纔の日數に傳ふる時、花や葉や、時に臨みて得難ければ、たはやすくはあらねども、木にもまれ、艸にもまれ、花葉のなき類にても、たぐへて容儀を寫さんに、強示し難きにあらねども、よしや、さもあらばあれ、凡千聞一見とや、眼にみやびやかなる姿を見、耳に道ある教をきかば、心に其妙所を究ん事、いとゞ諭し易からむ、去かのみならず、象を圖に顯さば、唯向前の興のみにしもあらず、後來此道にたどり入去るべくもなり侍りなんと、乞給へる君の有ければ、其心を慰んと、同志の君をかたらひし、時や、闕路に鷄もはからず、賤屋に戸ざしも忘れつゝ、千代に八千代を祝しける、君が代の民草も、豊に見ゆる、新玉の年の始に、挿ろめし、松竹梅の象より、氣節易れる、祝ひ日の挿花の姿をなん、寫し終りて、其數も三十六に滿ちければ、梓に登して、巻をつゞり、四方の薫りと題せしは、文化十とせ餘り五とせの春、不濁齋廣甫

華を瓶に寫す事は云々、石上舊き昔はさもあらむあれ、千賀の鹽竈近きよとなりては、挿花の流れ、八十瀬に分れ、れのがまに〳〵各競竹の林の友ずりに、蘭や、菊や、其美きを爭やうになんありける、そが中に、未生家のなたゝるは、はかなき草木も養ひたてゝ、花壽を増し、曲れる枝は撓直し、いともさがなき花葉は去り、虚實等しき理を備へ、弘弦三才の容儀をうつし、自人倫の禮節にしも及ぼして、此道の跡を踏迷ぬ駒のをしへをしかも誨されしは、あやしくも、挿花の妙所をぞ、未生家獨得たりと云も可也、と云んも可ならむか、これによりし、香をとめて門に入る人多かりし中にも、此不濁齊の主は、未生翁の高弟とや、事ありて、去年の冬、竹の都の跡吊ひ、伊勢の國に遊れしが、素より、好る道なれど、彼面此面の好士を集へ、新玉の年立三つの始の日、松竹梅をうひとして、四季趣の様々なる、祝ひ日花の入方を、三十六の瓶に寫し興せられしが、此道に心をしむる、もろ人の、うひ學のしをりにとて、其象を梓に彫せ、やつがれに、つぼの石ぶみ一筆加へよとあめれど、筒井の蛙、我計處せき住ゐして、花の道はゑぞしらず、物書く事のいともいとも拙けれど、云々結目分らぬ言の葉をかくしてぞ書つけ侍りぬ、文化十とせ餘り五とせの春、異世能堂濱居。

（未完）


節分の花
竹都

元日の姿（がんじつ）



同都
節齋延甫

漫錄

楠氏夫人異聞（女鑑第廿四號及第廿五號參看）

細川潤次郎

余は嘗て楠氏夫人の事に付き、傳聞せしまゝを世に公にして、東京學士會院にて演述せしことあり。又其後女子高等師範學校に於て、更に詳に演説せしことあり。余は主として柏原氏に傳はりたる舊説に據り、楠正成の夫人は上田兵庫頭の女と稱すれども、實は萬里小路宣房の女にして、藤房の妹なる由を記せり。然れども余は諸説を參考して考究の資とせんことを欲する者にして、此事に關しては、聊も臆斷を加へたる者に非ざるを以て、前説の外に河內國觀心寺の傳説と、大坂三番の定專坊と曰へる寺の傳説とを揭けたり。觀心寺の傳説に據れは、夫人は南江備前守正忠（南江備前守正忠は湊川の役正成と共に戰死せし人なりと云ふ）の妹阿久の方と稱し、正成の亡後領內甘南備鄉に草庵を結ふ、時人南妃庵と號す。正平十九年七月十七日歿す。玉山涌圓大禪定尼と謚すとあり。定專坊の傳説に據るときは、正行の母は、薄彈正少弼以隆の女なりと云ふ。

近日三河濟美館發行の皇道第十四號を閱するに、大坂府の龜井氏の説を揭載せり、其説は余か嘗て講演せる説を確む可き者にして、余は其考索の勞に向て深謝する所なり。因て其説を採錄して世人に紹介すること左の如し。

河内國石川郡喜志村美具久留御靈神職靑谷龜壽郎と曰へる人あり、此人は楠家の裔にして、數代の先大和守正直と曰へる人の夫人は、萬里小路家より來れりと云ふ、其說に曰く大和守橘朝臣正直氏令夫人は、萬里小路從二位藤原淳房卿の媛君敏子の御方と云ふ、正保四年吉田侍從卿の中旨を以て嫁し來れり。而して其の入輿の日を定むるや滋子夫人の入嫁せられしは十二月なりとて、先例に據り十二月と定めたり。爾後同家の婚嫁は、十二月を恒例とす。又楠家秘鑑に曰く、

御臺所滋子御方自田家出、實元享三年亥十二月

慈悲庵遺稿に曰く、

極月御臺所御入り、御名滋子、媛上田殿息女と申候へ共、其實は大納言樣御實女云々

河内錦に曰く、

靈光寺樣御臺所は、上田隼人正の息女と披露すれども、實は和田家御出生にて、元享亥年十二月朔御入輿あり。

赤坂昔話に曰く、

兵衞樣御行末覺束なき風說とり〳〵に付き、二十八日丸樣は觀心寺へ御出馬、御臺樣は都の御里方より云々

余は、此說を、世に紹介すること此の如くなれども、強て論斷を加へて前說を主張することを喜ばず。庶幾は、世の讀者の、余が一說を主張する者にあらずして、廣く益を求むなる微志を諒せらんことを。

今清紫女鑑

須賀の屋主人道別

簾をまきて、香爐峯の雪とよびし才、おどろくにたらず。于定國の高門をあげつらひし學、深しといふべからず。石山寺の參籠に、月の雫に筆そめし五十四帖も、われらが眼には、見るべきほどの物かは。學の道のたど〳〵しき昔の世の人は、かくてしもあれ。あはれ、文化の光あまねき明治の大御代におひたち、西の東の物まなびにたけたるわれら、いかでか、世をおどろかすほどの、はた、萬世につたふるきはの、文章なくてやはなど、思ひたち給ひしにや。さきつ年、花圃女史田邊龍子ぬしとなむいへるきみ、（今は三宅雪嶺翁の北の方）藪鶯といふ小説を物し給ひしに、その初聲や、うらめづらしかりけむ。世のとりはやし一かたならず。これより、女流の文學者、さながら、夏まへの蒼蠅、雨のあとの菌のごとく、數しれずいできて、なかにも、小金井博士の北の方きみ子の君は、家兄鷗外氏とならびたちて、しがらみ草紙に、ねんにいうなる筆をはしらせ給ひ、若松しづ子の君は、良人善治ぬしをたすけて、女學雜誌に譯文をかゝげ、薔薇のかをりのゆかしさを匂はせ給ふ。このほか、横井たま子（横井時雄氏の北の方）竹越ちよ子（竹越與三郎氏の北の方）家永なに子（家永豐吉氏の北の方）君たちは、あるは新聞に、あるは雜誌に筆とりて、有婦姦罪のことわりをあげつらひ、理學の幽玄をとき、はた、新体詩といふに、ゆかしき調とゝのへて、天地の

美をうたひ給ふ。この六人の君たちこそ、げに、いにしへの紫女、清女、和泉、赤染、讃岐などにもくらぶべきなれ。まことに、當世の才媛とやいはむ。女傑とやよぶまし。わきて、しづ子の君の見識高きには、ふぐりもつ男子も恥ぢ、かつ、おどろきて、魂けちぬべくなむ。しづ子のたまひしやう、世人、われを比するに、古の紫女を以てす。世人は、この比をもて、われに名譽の寶冠をくはへたりとなす。然しながら、われは敢て、こをもて、名譽として、わが心を滿すにたらず。見よ、わが理想と、彼女のとを。則、彼が叙する處の人物は、悉、これ、好色の輕薄兒女にして、事實の、たゞ男女の戀愛に關するのみ。而も、その愛情たるや、高尚なる意識精神の愛情にあらずして、卑しむべき動物的情慾の肉交にあるのみ。わが理想の純潔にして、圓滿完全、至美至善なるに、豈比すべくもあらんや。亦、その文体に至りても、彼は、たゞ、中古の纖弱なる國文といふ狹隘なる一隅に彷徨するのみ。わが、洋和漢を咀嚼折衷して、古今の外に、獨歩縱横するに較ぶべきかは。世人は、また、彼が著書の、高貴の間に賞揚せられたるを稱す。吾もまた、小公子は、辱くも、畏きあたりの乙夜の覽に供せられたり。此點に於いても、吾、豈、彼に劣るべきかはと、鼻のあたりをこづきて、いと得意顏にのべ給ひき。こは、まことに、道理なる言のはにして、またく、君がわれはめにはあらじ。なほ、この他、北田うすらひ女史、樋口一葉女史、田中夕風女史、秋香女史などいふ若

き孃達あり。尾崎紅葉氏の門下にて、硯友社の人人とたちまじらひ、おの〳〵、一かどの小說を物し給ふと聞く。あはれ、明治の大御代、なにぞも、かく、名媛才姬のおほき。たゞ聖代の餘光とこそいふべけれ。されど、さきに、女敎師の嘆あり。女子のむね〳〵しきは、牝鷄の晨鳴にたぐへて、しりうごといふ世に、果して、今清紫女の嘆なきか。

妻

林　甕　臣

妻は、容色なくとも、賢に身、健やかなれど、良し。男子、この外を望むは、贅澤なり。女子を弄するなり。

容色は、唯だ一時の見るめのみ。その當坐のみ。若き時のみ。子持ちに成らぬ以前のみ。腰細の蝶贏未通女、貞節なる、尠し。健やかなる、稀なり。織り縫ひの業すぐれたる、無し。學者本讀みを氣取り、遊藝を鼻に掛くる生意氣女學生、妻として、何の役にか立つ。妻は、それ、何の爲の者ぞ。遊冶郎などの相手と成るべき任に非ず。妻は、實に「家の大極柱」と、言うて可なり。一家の國務大臣、もし、その人を得ずして、間違ッたが最期、實に「六十年の饑饉」と、さへ言ふに非ずや。

ゆゑに妻は、貌よりも、心の、優りたる、良し。體の、强壯なるに限る、手足あから肥ゑ太りて、尻持ち嚴めしく、顏の、阿多福なる、福々しくて、良し。內政を理め働かするに達者で、良し。體格良き母の腹には、生まるゝ子、果して丈夫なり。

男子、妻を迎へむ。とならむ、遊冶郎、助兵衛ならざる限りは、斯うやうなる女丈夫を撰べ。國家に志を懐ける人傑の限りは、然るべき阿多福御前を愛せ。妻は、家政を執らする爲の者。子を産まする爲の者。

朴澤三代治氏傳

逍遙子

氏は舊仙臺の藩士、朴澤九左衛門の二男なり、通稱三代治、諱は行信、性質温厚、行義廉潔、能く身を愼み、能く衆を愛し、且つ才識ありて最も裁縫の技に長せり、不幸にして早く父母を喪ひ、零丁孤苦、備さに艱難を嘗む、稍々長ずるに及び、一日自ら其袴を濯ひ、豁然として大に感發する所あり、依て深く裁縫に志し、獨創自得、曾て師に就かずと雖も、精勵の効遂に悉く其術を極め、一として其製作を洩る物なし、すべて工藝には天賦の妙技を具へ、一種の物品を製造せんとするや、奇工異出、自ら其胸裡に湧出して、敢て其損敗を見ず、後專ら裁縫を業とするに至り、其工料を以て學資に充て、劍弓槍馬の武術を講し、又醫は之を原某に學び、禮は之を千葉某に習ふ、蓋し此の二道は裁縫と密接の關係を有し、之が爲め其本業上、發明する所甚だ尠なからず、而して近年師範學校に於て裁縫科を設置せし以來は、一層其の敎授に奮勵し、學科の程度を定め、教授の方案を立て、同時に又私立學校を創立し、以て數多の子弟を訓養するに勉む、斯業現今の隆盛を見る豈偶然

ならんや、其子弟を教育するや、碎礪懇篤、殆ど慈母の赤子を愛するが如し、今や其薫陶を享くる者、無慮二千餘名に及び、學校開設後の卒業生、亦實に一千三百餘名に到り、或は裁縫に、或は黼箔に、或は紋章に、或は學校教員に、或は私宅教授を以て業とする者、遂に全國各府縣に普遍するを見る、而して其製品を米國博覽會に出し、又歐洲人の請求に頼りて其製品を送れること數次あり、其著述には、裁縫教授用掛圖、裁縫教授書、裁縫餘言、松操學校規則書等にて、教授書は文部省にても之を採用し、小學裁縫科教授は右教授書に據るべき訓令あり、宮城縣にて職を教員に奉ずること琢玉小學校を始め、師範學校及び附屬小學に兼勤せり、而して教育其他の功蹟を以て褒賞を受けたるは、

明治十三年　宮城縣博覽會二等賞牌
明治十四年　第二內國博覽會褒狀
明治十五年　宮城縣より硯一面
明治十六年　文部省より康熙字典及硯箱
明治廿三年　第三內國博覽會三等有功賞
仝　宮城縣より木杯一個

にして先後六回なりと云ふ、氏行年七十有三の高齡に達せるも、今尙教授に從事し毫も倦ます、近者其門下の諸生、深く積年訓育の鴻恩を憶ひ、感奮措く能はず、氏か從來の德行偉蹟を蒐輯編著し、以て報恩の萬一を期せんとす。

大日本教育會々章贈與證狀

銀製會章　朴澤三代治君

教育上功績ありと認め審査員の審査を經て茲に銀製の會章を贈與し其功績を表彰す

明治廿七年六月十七日

大日本教育會長事務取扱委員

從六位勲六等　肝付兼行

從六位　西村貞

君夙に裁縫教授の術を修めて其道に通し曾て師範學校の教員と爲り又私立松操學校を設け以て女子を教授すること茲に十有七年遠近來り學び卒業する者一千二百有餘名公私學校に奉職する者七百有餘名の多きに至る此間刻苦難に堪へ遂に裁縫科教授の方法を案出し世に有益なる裁縫教授書及掛圖を著し其名聲四方に高く洵に本縣教育の名譽にして其功績著大なりとす仍て本部所定の規程に依り定置議員會の審査を經茲に中央部の名を記印したる銀牌を贈與して永く君の功績を表彰す

明治二十七年七月一日

宮城縣教育會中央部

宮城縣仙臺市私立松操學校長

朴澤三代治殿

女子健康たらむことを要す

田邊和氣子

おのれ、はやうより、彼方此方の地方なる學校にわりて、上流下流のをとめ子を、またしくもてあつかひたりしに、甲なる生徒は、學校へ通ふにも車にのり、髮の餝りよく身のまはり、あてなるか

さりを盡し、なよやかなる腰に、むらさきの袴引ゆひつゝ、ふりはへたる袂の追風は、今咲出る梅が香も、恥るばかりなるもてなし容体、こよなうみやびかなり。かゝる際なるは、召つかひ数多ありて、其家にては、人々にかしづかれ、冬は、火桶を、友として、寒さことをも知らず、夏は、清らなる家のはし居に、風待て暑さを拂はせ、手には筆と箸より外、堅き物は持たせ給はぬなめり。」乙なる生徒は、木綿の衣服りゝしく着なして、辨當も手づから持ち、冬は、はげしき風に、傘を持たる手さへ氷る斗りなるをいとはず、土さへさくる夏の半も、日をさふるばかりにもあらぬ傘壹本をいのちとたのみ、家に歸れど、汗にぬれたる肌着すら、手づから洗ひなどしつゝ、猶何くれと母の家政を助けてものするばかりなる際に生立は、顔つきつぶ〳〵とふとりて、さしもおもふ事なげにみゆるものから、えんにゆかしきかたぞ、おとりざまなる。

今、此甲乙の生徒の、体質をくらべ見れど、其健康なること、乙こそ勝りたれ。されど、甲乙のをとめ嫁して後、子を生しなど、乙の子また健康なることいふべくもあらざめり。そも、國家の爲には、人健康にして、おの〳〵、其の職務を充分に盡すにこそあらめ、体柔弱なれど、愛國の心其身よりあまれるも、いかでか國に盡しえむや。

おのれが古さとなる北國の樹木は、其のさまをかしくなびき、あるはねぢ〳〵しくゆがみたるあり。

こは、年毎の雪におされ、つねにはげしき嵐に吹なびかされて、かゝるすがたに生立なめり。」東國の樹木を見るに、直く立のびて其さまいとめやすし。この木どもを、木だくみが鋸鉈もて切りくだき物せむとするに、寒國の木は其質堅く、暖國の木は柔なりとぞきゝぬ。」されど、人も幼きより、寒き風あつき日影をもいとはず、外にいでゝあゆみ、寒きを持ち、堅きをくだくごときにたへてものせむには、おのづから體質つよくならむこと、今はたいふべくもあらざめり。」

又、上流と下流と其學才を比するに、甲は敏にして應用の才にとめり。乙は稍不怜悧に似て應變の力に乏し。されど、乙は忍耐力ありて、甲一度してよくすれど、乙十度するばかりにいそしみ學ぶことはた甲にまされり、これ又、身體健康のゆゑなるべし。」甲は天然怜悧なるものから、其體柔より、あるは校則にたへかね、あるは科業を踏かねて、半途にして退校するもの多し、故に學業の結果、又、乙の人こそまさりたれ。」女は、國の爲何をかなさむとする、女は、いかに才高くとも官省に出て、いかでか國事をとるをおむや。されど、よく其家を守りて、健康なる子を養成するこそ本分ならめ。」されど、上流の令嬢がた、體質を健康にし給はむには、其身分より一等下りて麁服を着、手づから辨當をも持、霜をふみ雨にぬれて學校へかよひ、

家にはす時は、召使ひ人と諸共に、何くれと立まはりて父母に仕へ給ひなむ、一には體をつよからしめ、二には家を修むることにもかゞくなれ給はむ。身體柔弱なるときは、家宰の任にたへがたきのみか、柔弱なる子を生じて、國家の為になるよしなく、いたづらに醫師の貯蓄をたかめしむるに至らむかし。哀れ、世の令嬢よ、體育に心を用ひ給へね。」

うすこほり（三）

霧の舎主人寄贈

二十番

左　持　元

はるかなる比良の高根はかきくれぬ
今や三雪の降しきるらむ

右　慶章

庭の面にけさ降つもる白雪を
とふ人あれどあとはいとはし

とふ人をいとはぬ庭の雪よりも跡なき雲のうちぞゆかしきところ申遣し侍れ

二十一番

左　持　夜紗

白雪のつもる朝となるまでに
ことしも冬はふかくなりつゝ

右　擧直

おもふどち打かたらひて更す夜に
音なくつもる庭のしら雪

ことしも冬はなど感情少なからず承り侍り又う

ちかたらふ夜に音もせずつもるらん心にくさ中
中心ありてまたあはれならずやは
あし引のかなたこなたもわかぬまでふりしく
雪に道はまとひぬ

二十二番

左　　　近

明たてし松の嵐もうつもれて
夜ふかき月にふれる白ゆき

右勝　　　貴林

信濃路はしら雪紅葉こきませて
都にみざる錦なりけり

たゞ柳さくらとのみ思ひとり侍るに
めづらしく織出けりな月てれるみやこもよる
のにしきならねと

二十三番　名所松

左持　　　常清

墨江のなかをの浦の小まつ原
千歳の外のたねなかりけり

右　　　齢

子日にはもれたるゑかの浦まつも
千世のためしにひかれけるかな

俊成卿のさゝなみのゑかの浦まつふりにけり
誰世にひける子の日なるらんとぞよみ賜へるは
言外にふるき都を思はせたるにて心ふかくも承
り侍り千世の例にひかれんは志賀ならずとも有
ぬべし
子日にもいかでかもれん小松ゑらもとより千
世の外にしあらねぞ

二十四番

左持　成久

うら風の吹くるおとも高砂の
尾上の松はかけふりにけり

右　慶章

朝ぼらけ立まふ霧の絶まより
ほの〳〵みゆる唐崎のまつ

立まふ霧何ごともなく侍れど思ひの外にけしきうかひて侍りまた尾上の松もかすかに名だかきけちめ見えずやは

双ひては高さことなる陰もなしいづれから崎
波はかくべき

二十五番

左持　文秋

ひともとの根さし榮てむかしより
色もかはらぬしかの浦松

右　直躬

朝つく日さしての磯のそなれ松
なれしかけともたてるたつ哉

此ゑかの松もなみ〳〵には見え侍らず

一もとの陰と立ならぶまなつるのしるきも後にくれざりけり畫かきたらん朝つく日のさままたいはんかた侍らじ

十六番

左　周虔

來てみれむちよの古道ふりたれど
松は昔の色にさりける

右持　實壽

夏引のいとかの山の松のはの
　　みどりは深くそめてけるかな
千世の古道けにもむかしのすがたは侍れどまた
このごろの或人の今のしらべにも似たるは口を
しかりけりこなたはたゞあたらしきのみにて中
中にや
　　いろのかみふるき筋なく染わけつこれやこと
しの夏引のいと

二十七番

左持　　秀胤

ひさ方の天つをとめもかへるべき
　　雲路忘し三保の松はら

右　　貫林

萬世をつもりの浦はあせはてゝ
　　ひとり榮るすみのえのまつ
三保といひ津守といひ孰れ相生の名所唯ならず
世にふたつなきすがたこそならひけれをとめ
の羽袖さしの姫まつ

二十八番

左持　　天朗

浦なみのよるとしことに唐崎の
　　松は老せぬ色やそふらん

右　　惠岳

うちつけに寒くもあるかな
　　白雪の津守の浦のあら小松原
とし毎にそふらん色はいとものどかに打つけに
さむきけしきはいとはげしくこれまたすぐれた
る持にこそ侍らめ

しら雪のつもりの松に双ひてはいとゞ老せぬ
色の見えつゝ

二十九番

左 勝　　芳

むら時雨ふるかと聞は唐崎の
　松に落くるひらのねおろし

右　　儀貞

清江のうら吹風のはけしきに
　なれてもたてるきしの姫松

岸の姫松幾本かあらはれ唐崎の松も一木ならず
生出ぬるには今は判者も帆かけつへうころさり
とてやはと
　村しくれふりさけみれど吹おろす音なは高し
ひらの山かせ

三十番

左　　元

敷しまの道しる人や尋ぬらん
　あこやの松の遠きむかしも

右 勝　　曉月

波よする白良のはまの濱まつは
　いとゝみとりろ冴けかりける

あこやの松のこのまより出べき月のいてやらぬ
とよめりし誠に遠き陸奥を思ひよせられたるい
となつかしくもあはれにはみえ侍れと
夕やみは道たど／＼しさやかなるしら良のか
たに宿やからまし

三十一番

左 持　　夜紗

長をかの松にむかしのことゝはん
　ふりし都はかみさひにけり

右　久道

武島のわかの浦わの松かねは
　千世の友とやたつも啼らん

長岡の松すかたはやすらかにことなく聞ゑ侍るべしされとみな古歌の詞にしてめつらしとには侍らし
　式しまのうたの友なる心とやたつものとけきこゑに鳴らんならめとさはしかと聞とりかたしやふりし都はゑらへわしからてこゝろ詞ふるくわかの浦は心ありけにてすかたはすくれたりとも申かたし

三十二番

左　近

ひとしほのみとりをそへて今もなほ
　栄をみするわかの浦まつ

右勝　擧直

万世をひとりへにける唐崎の
　松と友なくれもふべらなり

たひ〳〵みし中に
さゞなみのこの唐崎の松ころはまことにひとりたてるなりけれ

三十三番

左持　久敬

播磨かたひゞきの灘のうら風に
　ねさめやすらん手枕の松

右　正高

むかしより久しき物の例には
先ろひきける住よしのまつ

みちのくの武隈ならて珍らしきふた木の松をわれは見しかないとすぐれたる卷軸の一むすひただかくころはうたひとめ侍らめ

人々のまのわたり例のはしりがきす晝過るより暮わたるころ書をへ侍れはもとより何ことにかは侍らんとく／＼引やり賜ふへし

また此卷鴨河のほとりにてものし侍れむけふのけしきをとりあへずうすこほりとや申べからんさるはむすび定めぬ歌のうへには侍らず危ふ／＼ふみわたりぬる判者がこゝろの名にこそは侍らめあなかしこ

文化十二年しはす三日しるす

景樹

摘草

鹽井雨江

春雨の降るとはなしに色づきし野邊ほど、をかしきはなし。まだうらわかき緑の草がくれに、遠近と、柔き花の、薄紅に咲きしなど、思はず知らず、手にも手折り、袖にも摘みて見まほしき心地せらる。まして、ものめづらしき少女、うきことと知らぬ

童など、いかでか堪ねん。罪も無き草花、むざ〳〵とむしり、糸につなぎ、籠に入れなどして、他念もなし。

此も同じ群にて、誰が家か、寵愛ふかき姫君ならむ、年頃は十六七とおぼしき二人の少女。ろが一人は、頭髮を唐人まげに結び、藤色の小紋形の袷を着、蒼色の羽織を被たり。容貌は尋常なれど、口元に溢るゝ愛嬌には、露ならねど、濡れまほしき心地せらる。今一人は、髮形も西洋風にて、鰕色の服を着けたり。顔の貌は醜からねど、眼ざしの鋭く、口つきの輕げなるは、蓮葉ならねど、浮きたる心知らる。兩人とも、手籠を提げしが、小紋の方は、菫花のみにて、鰕色の方には、蓮花菫花茅花など、樣々の花入れぬ。かゝることも、自ら人の心の影を寫つさむか。

花を追ひつゝ、水田近く迄來りしに、里の賤の女の、おなじ頃なるが、田の邊を亘りつゝ、あやしき水草を摘み居たり。二人は流石に賤の業を知らず、かゝる草をむ如何にか爲ると、あやしげに長視め居たり。小紋の少女は、態て側に立ち寄り、卒爾ながら、此は何といふ草にてかと云ひしに、賤の女は、思ひがけなき尊き邊の人に聲かけられ、心慌てけむ、あはれや、足踏み迯して、水田の中へ轉げ落ち、泥水

四方へ飛び散りしかど、小紋着たる少女の足袋も下駄も、泥水にまみれ、衣物の裾さへ汚されぬ、洋服の少女は、斯くと見るより、馳せ寄りつ、こはそも粗忽なる人かなと、口を尖して罵れど、賤の女は慌てまどひ、哀れや、おのが衣ものは云ふも更なり、手も顔も汚れしを、其儘に、大地へ膝つき、よしなき過し侍べりつ、いかで容るし給へと、詫び入るに、すみ子は、いとゞ氣の毒に堪へず、いかでさる詫言に及ぶべき、此は和主の罪にあらず、なか〳〵に、よしなき事を問ひまゐらし、妾があやまちにて侍る、構へて心煩はし給ふな。偖も、和主は什麼に。痛みは無かりしや。危ふかりき、切て顔の汚れを拭ひねと、絹の半拭を取り出して渡せど、賤の女は、柔しき人の言葉に、ろゞろ涙ぐみて、妾が家は彼處の伏屋、いざたまへ。御み足の汚れなりと、切めて洗ひまゐらせむ。いで〳〵と勸むるに、さらばとて、すみ子は洋服の少女に對ひ、花子殿、妾は少しく遲くなり侍れど、御身はこゝよりお一人、先に歸りてと云へど、花子は自分の小言を、反てすみ子に打消され、心地よからず思ひしかど、不興氣に、ほんに日も暮れますゆゑさきにと、唯一言。すみ子は、賤の女に導かれてゆけど、實にいぶせき賤の藁屋、漸くに雨風を凌ぐど

かゝりの様は、兼好法師が斯くてもあられけるよといはれしも、斯る家にこそありけめとおぼえらるゝに、父母も畠にや出でけむ、見えず。家には、四歳ばかりなる男子のあるのみ。すみ子は、手拭を濕して、衣物の裾を拭ひなどする中に、賤の女は、悍々しく足袋を洗ひ、下駄をふくなど、いと忠實なり。かゝるもの識らぬ賤だに、情は知れり。人は唯心なりけりと、すみ子も、そゞろ涙の落つるをおぼえず。縁の端に腰うちかけ、着物の濡れを乾しつゝ、定し和主の營業なりけむに、よしなき妨害をし侍りつと云へど、賤の女は、如何で、妾こそ御大切の御召物を汚し、御連れの御女中のお腹立ちも、心苦しや。能きやうに、御詫を願ひ侍ると、恥しげに云ふ。いかで、妾が事を、彼の人の構ふことに非ず。數ならぬ衣物の汚れなど、皆無心に懸けなしたまひそ。それより、和主こそ衣物の痛く汚れしぞといへど、賤の女は微笑みて、土の中に育ち侍る身が、泥などの汚うて何にかせむ。さなくも、着物は泥にまみれ侍るが常なりと云ひ出でぬ。すみ子は、かくてあるべきにあらねど、手拭に足袋をつゝみ、何やらむ紙に包みし物を、子供の膝にのせ、母御が歸られなど、菓子にても買うてよと云ひつゝ、少女には忝じけなかりきと、厚く禮を伸べて、歸ら

むとすれど、賤の女は斷け出でて、かゝるものをもいかでと、押し返すを、是非にとゞめて、にぐるやうにしてかへりぬ。

時は昔の彌生なり。空うらゝかに霞み亘りて、そよ吹く風も寒からず、照る日影も暑からず、漫歩せむには好時節なり。花は、名にをふ櫻の咲き初めたることなれど、上野の山は、雅人騷客の人波を打ちぬ。女はやん事なき邊の姬君より、あやしき小路の娘子まで出で、男は高帽子金時計の御前某より、狩頭巾盲縞の筒袖着の八公の殿御まで出で、書生は角帽金ボタンの學生より、妙に紅髮細眼の女生徒まで出でぬ。誰れもかも、花には狂ふ人心なり。瓢を肩に舞ふもあり。酒樽の底うち叩きて、歌ふあり。或は醉ひところけて、芝の上にうろぶく男子あれど、人波のまに／＼、千鳥をまねぶ妻君あり。相撲を取る子供あれど、鬼遊びする娘あり。さながら、心も空に魂も無きが如し。大概は、花を見るにあらで、皆人を見るにぞある。それも、入相近く無情の鐘に驚かされ、浮世の夢の覺めぬまにと、思ひ／＼に家路へと志したる跡は、落花狼藉。

花子は下谷邊に住むとおぼしく、手折り來りし花籠を片手に、何か頻りに思案しつゝ、擂鉢山近く來りしが、見知れる人の會ひけむ、急に笑顔を裝ひつ、會釋しぬ。何人ならむ、年の頃は五十路あまりの切髮の婦人にて、衣裳といひ、身のこなしといひ、いと品よく、若き下女をさへ連れたり。花子は、靜に近寄りて、御遊歩にてかと云へど、婦人はハイと言葉少なに答へしが、軈て語を次ぎ、御身は又何地へか行かれたる。平本の阿すみ孃に誘はれ、摘草に行かれしとか。其は此の上なき鬱散し給ひけるよ。すみの方は、柔しげにおはすが、毎時もあのやうにてかと、問ふ人も心あり。答ふる人も又心あるか。日來より賑かなる氣質の方にましませど、けふも危ふしと妾が止めまゐらすを聽き給はぬものから、水田の中へ。あなけしからぬ言葉の端、雪を花とは何事ぞ。塒を爭ふ鳥の、喧しく梢に騷ぐも、心ありげなり。

すみ子は、賤の女に別れをつげて立出でしが、徃く途次も、伏尾の態、少女の樣子など、とり〴〵思ひつゞけられて、歩も捗取らず、漸くに日暮の頃、駿河臺なる我家へ歸りぬ。折能く、父母も兄も留守にて、年來遣ひ習れし腰元の梅、しかも、唯すみ子の善かれとのみ思ふ梅のみなりしかど、大に安堵して、梅や塵がいたくつき

たれど、よきやうにしてよと、衣をぬぐを、梅はうけとりて、ほんにと唯一言、ふかくもあやしまず、父上はと問へど、母上と共に向島へ花見に行かれ、歸りには池端の池野へ立寄らるとの梅の答。すみ子は、思はず溜息吐けど、腰元は聞きとゞめ、御悦びこそあれ、御嘆息とは何事ぞ。池野の殿は、御姿といひ、御氣質といひ、人並すぐれてやさしく、其が上に學問も世に秀れておはすよし。かほど良き御縁が又と他所に侍る事かは。鳴滸がましき言葉には侍れど、何時までも、親御の傍にのみ、居給ふものにもあらず。花も月も、折り節を過ぎては、物凄じく成り侍るとは、兼兼御身の讀み給ふ艸紙にて覺え侍る、何も折節にこそ叶ふべけれ。妾は幼て親に別れ侍りしを。御身の母御の、此の上なく哀れの者におぼし召され、御身のおん護りに召させ給ひ、何くれと厚き情を受け奉りぬ。奥樣のおんかくれの折りも、妾を近く呼びつけ給ひ、今逝く身の兼懸りは、唯孃のことのみ。返すぐも、心に懸てよ。若しも繼母のまゝしきこともあらむ、孃の影身と成り呉れよ。今世の賴みなりと仰せられしが、妾ごとき者を、かほど賴み遊ばすと思へど、嬉涙にかいくれ、及ばぬながらも、杖柱とも成りまゐらせむに、御心易かれと申しわけ候へど、奥さまが梅や

安心せしぞと、いと嬉れしげに微笑み遊ばしゝ御顔、今なほ眼の前に見奉るやうにこそ、今の奥樣の御氣のむづかしくましますにつけ、御身の上の、陰ながら痛ましく、若し奥樣の御遺言に反く事もやあらむかと、とさまかうさま思ひ煩ひ侍りぬ。されど、けふ此頃は、御身の上も落着の定まると聞て、嬉しくも悦ばしく、年頃積りし痞も、一時に下がりし心地して、人事にのみ聞きにし春も、今年ばかりは、我身の上の心地ともおぼえまゐらすにこそ。丌を御嘆息遊ばす御心の、え心得侍らずと、忠義一圖の腰元の言葉に、すみ子は涙ぐみて、梅としたことが、又悲しきことをいひ出でゝ、妾を泣せてか。妾は父母の御言葉とあれば、何事もいなまず。父上の善と仰せらるゝ事を、いかで惡と爭ふべき。なれど、梅や。人は見懸に寄らぬものなり。艶かなる櫻はうつくしけれど、實なく。はでやかならねど、桃は此の上なき實を結ぶなり。遠き中は青々と見ゆる春草も、近づけば、倒々に、見劣りのする習ひ。梅は何事も知らでこそあれ。妾は何事も能く知りてなり。妾は人に本意なく思はせて、我心を慰めむ事は、德に反けりと思へばこそ、嘆息したるなれ。さいはひ何事も父の仰を反く事かは。何となく物淋しくなりぬ。母の佛前に、燈火ともしてよと

云ふをしほに、梅も立上りぬ。主、主なれど、下も下なり。月毎日毎に、あさはかにのみ流れ行く世の中に、なほかゝる人の在りと思へど、世の中もなほおもしろき心地ぞすなる。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

むかし雅房大納言といへる人あり。才秀でめでたくおはせしほどに、院のおん覺に、殊の外に止事なく、何時かは、大臣に上せんものと思ひ給ひき。さるに、院の近侍の中に、日來ろを心憎く思ふありけん。雅房卿は、鷹にかはんとて、生たる犬の足を切り取りたりしを見たりと告げしかど、院もいとあさましく思ひ給ひ、御氣色も常に變らせられ、遂に大臣の宣下もあらでむなしく止みにきとなむ、讒言ほど入り易きものはなし。菅公のごとき賢人も、讒言には筑紫のはてに流され玉ふ身を、柵となりて止むる術もおはさゞりけり。まして尋常の人をや。あはれや、一點の塵なき、一滴の濁なきすみ子も、浮草の根なし事に、あられなき誘をうけ、思ひ懸けなき父母の怒りに觸れ、梅と諸共に、此頃賑はれし日暮の里の別荘へ蟄居申し渡されぬ。されど、すみ子は、さかしき生れなり。月、いかで自ら曇らん、浮雲の止むを得ぬが

ある故なり。花、などて自ら散るを好まん、吹く風のつれなければなり。我心だに清くば、何事も、さてこそ止むべけれ。浮世の事は、兎にも角にもあれかし。流れゆく水に同じ心を持ちたらんには、何とて穢れのあるべき。世の中は、暗からぬ心をこそ常に樂まめ。さすれば。何時とてか、月影の曇るべきと思ひさとりて、なか〳〵に悲しみもせねど、梅は物事に心細き生れとて、いとゞ悲しく、軒近き柳の糸の、そよ吹く度に、繰り返す心のぐち。庭の櫻の、心づからと散るにつけ、心も掻亂れ、すみ子の思ひあきらめて、更に心ともせず、住みなれざる別莊の朝暮を、物めづらしげに起臥するにつけ、獨り心に口惜く、物事に賢こき人の、などてかゝる事には似給はざるものぞと、おもひむすぼれて、解くよしもなき折りから、すみ子はいろ〳〵と馳せ來り、梅や金魚にものやるに、數を取りてよと、心なき言葉に、今は堪へかね、金魚などは打ちも捨て給へ。何時まで、さる物、珍らしくおぼすぞ。此頭の御身の上の、心には懸り給はずや。あられも無きことを惡しざまに云はれし事を、口惜くはおぼさずや。御身の名を傷けし人をも、恨みとはおぼさずか。人に打ちも叩かれもし給ひても、なほ忍びておはすかと、疊たゝかぬばかりに怨ずれど、す

みす子は態と微笑み、又しても、梅のをかしき事を云ふ事よ。そしるも笑ふも、人にこそまかしたれ。かゝる事は打捨てねかし。何事も心一つをわが住家とおもひて、住家をこそ清くもため。あだし餘の事は、兎ても斯くても、構ふべきにあらず。柳は緣に、花は紅とは、自ら定まりしものを。善惡の定は、天地にまかしてん。さはなきか梅やとさとされても、今は倒々に動かず。心とやらむ、住家とやらむ、御身は才すぐれてましませど、去ることにても忍びてん。常よりもうときき妾は、何をよすがに、什麽にして、あきらめ侍らむ。昨日奥樣の物語に、池野の殿は、今日花子と婚禮遊ばすとか。思へば〱憎きは花子なり。人知れず聽けば、花子は、先の日摘草の折り、おん身が輿に乘じて、思はず知らず、水田の中へ轉げ落ちたまひしとか、池野の母御へ云はれしときく。去る佻々の人にてはといふが、破談の起りのよしと、涙ながらに打語る、此の一言は、流石に、すみ子の住家を荒しけむ。むら〱と雲霧のかゝり來て、みどりの眉をくもらせたるが、又やがて晴れわたりて、何心なきすみ子の氣色。梅は猶樣々と恨みつ歎きつ、果しは更に無かりける。折りから、請宿の婆が、女中を目見ゑにと連れ來りぬ。梅は慌てゝ、泣顏を洗ひにとて立ちぬ。そ

かうして呼び入れて見れど、思ひがけきや、先の日に見し賤の女なり。すみ子は、和主か、先の日は忝けなき世話に成りしといへど、賤の女も頭を垂れ、其節はいと粗忽なる事し出でゝ、召物を汚し侍りしが上に、此の上なきものをさへ給はりてと挨拶す。梅は何事か、皆無わからず。和主なれど、心も知りたり。煩はしけれど、煮焼の業を諾きくれよと、すみ子の言葉に、賤の女は、其夜より召仕はる事と成りぬ。女子どちは馴れ易きものにあり、かてゝ加へて、雪は賤の女なれど、生質柔しく、何事にも梅にかたらふものから何時しかこよなき中と成り、摘草の日の出來ごとなど、殘りなく語るに、梅はさる事と知り、恨みいよ〳〵深く、すみ子に其の事を物語り、是非に此仇を復してと勸むれど、すみ子は、いかでさる事はとて、うけひかず。去れども、思へどいとゞ口惜さ遣るかたなく、起きても夫れをのみ思ひ暮し、夜もその事をのみ思ひ續け、物もほしからずとて、食事も捗々しくはえ食はず、はては物狂はしく成りもて行き、唯佛前にかしこまりて、濟まぬと計り繰返すのみ。雪はまた、浩る事の起りも、我身故と思へど、此もいと心苦しく、兎やせむ、斯くやせんかと、案じ煩ふさまもいぢらしく、峯に懸る白雲は久しく留らず、水の上の泡は

聽てきゝ、夢現の堺をわかず、有か無きかの世の中に、空しき形は、兎ても斯くてもありなまし、頼むは唯心ぞかりと、我獨り悟りしすみ子も、さまで思ふ人の心の信實も、いかでか憎からむ。今ははと〳〵困じ果てゝ、兄を呼び寄せて、此の事をうち語りぬ。兄もさぞかり濁りなき妹の心には、うたゝ感心せしかど、主をおもふ梅の心も、又あはれなり。かてゝ、自らも母なき後は、形身とも思ふなる唯一人の妹の、去るよしなき誣言をされしときゝては、なぞか心地よからるべき。男は男らしく物事に潔し。雪を伴につれて、久振りとて、池の端の池野の家を訪れ、四方八面の物語りより、雪の身の上など、不思義をかたりきかせぞ、花子の顔色、不忍の水より青く、雪子の面影の、比良の雪よりも涼しかりけるとなむ、其の後の事は知らず。歌二首あり。

雪もとけ梅もほゝゑみ日暮は
　　住みよき里となりにける哉

不忍の池のさゝなみ立さわぎ
　　みぎはの花の影ぞみたるゝ

文林

田上螢

小山田のあぜこす水のおとすみて
　ゆふべ涼しくほたるとぶなり
　　　　　　　　　　　東久世通禧

山かげのくらき方よりあらはれて
　田中のみちをとぶほたるかな
　　　　　　　　　　　毛利　元徳

ゆたかなる年のひかりを見する哉
　田の面にすだく夜のほたるは
　　　　　　　　　　　近衛　忠熈

小山田にうつるほたるの影見れは
　さなから星にかはらさりけり
　　　　　　　　　　　鍋島　直大

早苗とりかき濁したる田の面にも
　うつるほたるの影はかはらず
　　　　　　　　　　　長岡　護美

螢飛ぶ小田のあぜみちせばけれは
　こゝろの儘におはれさりけり
　　　　　　　　　　　高崎　正風

うちわたす門田の稲葉吹くかせに
　くるゝもまたて飛ぶほたる哉
　　　　　　　　　　　前田　利嗣

草とりて賤はかへりしかきつ田に
　ほたる飛交ふかげのすゝしさ
　　　　　　　　　　　津輕　承昭

石山　基正

燈火のうつると見れはかつ消えて
　賤かかと田に飛ふはたるかな

前田　利鬯

早苗とる人はかへりしゆふくれの
　門田のおもにほたるとぶなり

竹屋　光昭

田に出し玄づがゆふべの歸るさを
　送りかはにもほたるとびかふ

本多　忠貫

夕されは門田のいなはふくかせに
　見えかくれつゝ飛ぶはたる哉

池田　政禮

せき入し田の面の水にうつろひて
　もゆるほたるの數そ見えける

水野　忠敬

小山田にほたる飛交ふかげ見れど
　風なきよひもすゝしかりけり

前田　利昭

千町田の稲葉なみよるゆふかせに
　かげもみだれて飛ぶほたる哉

長谷　信成

早苗とる賤か小かさの日も暮れて
　くらき田の面に飛ぶほたる哉

前田　利聲

稲葉吹く風にみだれてとぶほたる
　田毎にうつるかげぞすゝしき

宮地　嚴夫

しげりあふ田の面の稲葉露みえて
てらすほたるの影のすゞしさ
北郷　久政

しらとりの鳥羽田の面のゆふ月夜
おぼつかなくも飛ぶほたる哉
小出　粲

あせつたふ子どもの聲は聞ゆれど
田中のほたるかげもさはがす
坂　正臣

ふたつみつほたるの光みえそめて
田の面しつかに日は暮にけり
植松　有經

家もなき山田のくろにともし火の
許多みゆるやほたるなるらん
谷　勤

さみだれのおこたり見えて浮艸の
生るみつ田に飛ぶほたるかな
大口　鯛二

さみだれに小田のあせ道土くえて
ゆかれぬ方に飛ぶほたるかな
鎌田　正夫

里遠みおふ子も見えぬ小やま田の
ほたるの影のしつかなるかな
松本　高明

ふたりとは行かれぬ細きあせ道の
あたりにあまた飛ぶほたる哉
千葉　胤明

蟲をとる田中のかゝり吹くかせに

なびく方にと飛ぶほたるかな　岩崎　勝従

山もとの蚊遣のけぶりくらけれど
田面さやかにほたる飛ぶ見ゆ

天鈿女命　佐々　豊氷

うけふせてたゝへあげけん言葉は
かみよながらに榮えぬるかな

朝撫子　三輪　義方

あさな〳〵まなびの庭に通ふ子が
かざしになりぬなでしこの花

静女　菊池　眞澄

たきゞこるかまくらやまの下風に
なびくともなきをみなへし哉

風前螢　太田　貞一

ひらあしの葉末をわたる夕かせに
露とこぼれて飛ぶほたるかな　柳原　愛子

田上螢

風渡る小田のさなへの葉すゑより
露もこぼれて飛ぶほたるかな　鍋島　榮子

とらんとて畦道つたひ來て見れど
田面はるかに飛ぶほたるかな　蜂須賀隨子

小山田のみしめにつたふ五月雨の
しづくと見えて飛ぶほたる哉　前田　朗子

夜や更し賤がかど田にかずろひて
ひかりさびしく飛ぶほたるかな

保科　節子

ふたつみつほたるの影も數そひて
田のもにあめの晴間をぞしる

小池　道子

せき入るゝ水の流れをたづね來て
門田のおもにほたる飛ぶなり

北島　以登子

河風にふきおくられてをやまだの
早苗のうへにとぶほたるかな

鳥尾　廣子

早苗とる賤はかへりしをやまだの
水かけくれてほたるとぶなり

小笠原　艶子

みつふたつ飛交ふほたる影見えて
田面をくらくなりにけるかな

服部　磯子

賤が家の垣根はなれてさなへぐさ
うゑし山田にほたるとぶなり

三輪田　眞佐子

壁

壁に耳ありとしられてきり〴〵す
くちの門をもさせよとぞなく

仝

折にふれて

丈夫のいゆきまもれるいもたちの
たけき眞袖にはるかぜそふく

安東　菊子

野川水雞

いへもなき野川のきしに何をかも
たゝくまねして水雞なくらん

師岡　須賀子

舟中納涼

ともつなをとく〳〵夏や過ぬらむ
　　ころもよぶまで舟のすゞしさ

○正誤　前號文林小池道子の歌に山家夏前田朗子の詠に庭卯花の題を洩し且遠山いね子をはね子とせしは此上なき疎忽なりしを謹みて此に謝す

樵石先生を送る詞

落合爲誠

樵石先生此度筆硯を携へて都を出で、房州保田なる存林寺に赴かる。塵を拂ひて、僧と禪を談せられむとにもあらず。妻子を捨てゝ、世に跡を晦まされむとにもあらず。さては如何なるにかといふに、井上子爵の撰られたる、前熊本縣知事富岡翁の頌德碑の文を、書せられむが爲なりとぞ。先生の意を用ゐらるゝこと、深しといふべし。夫れ翁は、久しく熊本縣知事の職に在られしほど、縣人の爲に、殖產興業の事に大に力を盡くし、永遠の計畫をなして、三角港を築かれしなど、功績最多かりき。翁の仕を致されし後、縣人の翁を慕ひて、頌德碑を建てむとするに、至れるも、亦宜ならずや。今子爵の文を見るに、洋々たる數千字の大篇にして、翁の功績を列擧せられたり。子爵は、世に在られしほど、一代の名臣はた文宗として、人人に欽仰せられしかど、其文品の如何なるかは、言はずもあるべし。彼の存林寺は、有名なる禪刹にて、前は渺々たる房州灘に瀕み、後は峨々たる鋸山に據り、形勝の地を占めたる靈場とかや。されど先生游を趁ひて彼所に赴き、風塵を擺脫し

て、身心を清淨にし、三斗の墨を磨り、一枚の筆を執りて、縱横意の如く揮灑せられなど、雲煙起り、龍蛇動き、斯道の三昧妙にして言說すべからず、禪機活潑其中に在りて、僧も感歎し、佛も點頭をやせむ。抑々先生恬淡にして富貴利達を求めず、其書に於ける工夫涵養、三十年一日の如し。其嗜好推して知るべし。故に其筆法、晋唐の精髓に參透して、別に、機軸を出だし、遒勁、奇拔、瀟洒、飄逸、皆佳ならざるはなし。殊に草書に至りては、實に鬼神の端倪すべからざるが如し。か丶れど此度の事あるは、固より偶然にあらず。まして先生も亦熊本縣人たるをや。あはれ先生の書成りて、大篇の文字石に彫られ、一個の豐碑三角港に建たむ日には、山高く水長き處に、更に偉觀を添へ、翁の功績も彌々顯はれ、縣人の恩に感ずるほども、益々著るかるべし。生先を送りて、思ふま丶をかくなむ。

祝賀會につきて微志を生徒諸子に聞ゆる辭

在山口縣　大島常雄

六師海を渡りてより、一度動きて成歡牙山を夷らげ、再びにして平壤の金城鉄壁を碎き、黄海敵艦の轟沈となり、九連は城を空しうして走り、鳳凰翔る能はず、秀巖もろきこと水沫の如く、いよ丶進みて東洋第一の要塞を陷ること稚葦をひしぐが如く。群れる羊を驅るが如し。はては海城蓋平を取り、ほと〳〵清祖宗廟の地を屠りつくして、

南の方紫禁城を畧し、直ちに進みて威海衛を陷れ、敵の北洋艦隊をして先づ其據るべき地を失はしめ、遂に其堅艦鐵艇を目たゝく間に水底にうち沈めてけり。かくのみからに北京の王都其危き事鳥の子を累ぬるが如くなれるをもて、彼國の上下大におぢ畏れ、遂に降使を我に入れぬるも、一び二びは禮を具へず、道に背けるを、我
大君の嫌ひ給ひ、棄て給ひて、國外に逐ひ放ちけるに、彼國いよ〳〵おぢ恐みて、禮を厚うし、辞を卑うして、渝盟を悔ゆるの誠を明にせん爲、其大臣李鴻章を降使として派遣し、土を割き、幣を納れ、十余月の久しき結びて解けざりし兩國治平の回復を致したり。是に於てか我
皇宣戰大詔の大目的を達し玉ひ、皇威は八表に震ひ、前代の未化せざるを化し、徃帝の臣たらざるを臣とするの運に及びぬ。嗟夫かくの如き大慶事、かくの如き空前の大業、之を心に紀し、之を肝に銘して豈祝せざるを得んや。これ吾黨諸子が殊に今日の地久節を生日の足日と撰ひて、この祝典を擧ぐるゆゑならむかし。然りと雖も、余は諸子等と中夜沈默戚容長息流涕頤に交るが如き事も、この祝宴場裡に伏在することを思はずむあるべからず。謹て成務帝の勅詔を掲げて、諸子に示さなん、

其宴樂之日、群卿百寮、必情在戲遊、不存國家、若有狂生、而伺公墻閣之隙乎云

かく誦し畢れは、忽ち天八重雲を千別に千別き、高山の伊穗理を搔き別けて、いとく神さびたる

聲すなり、耳を傾けて之を聽けは、

犬の勞を鷹に奪らるゝ歌とて

霰ふる、神の御代より、武きわさを、侚ふ國と、すめらきの、神の命は、丈夫の、健き男兒を、めし玉ひ、誘ひまして、御狩せる、其時にしも、犬養に、狗を養しめ、御縣を、ふみあらすなる、猪鹿を、ふせく爲には、御縣の、犬飼をおき、御狩にし、つかふ爲には、御手養の、つかさまけつゝ、朝には、猪ふみれこし、夕には、兎とらしめ、御こゝろを、はるけ給ひて、かくのさまに、千万國を、時しあらは、擊きためんと、思はして、ありけるものを、いかなれか、その犬飼は、御手養の、取にし物を、ゆくりなく、鷹とふ鳥に、取らせけん、あはれはかしや、おその犬飼、うつ蟬の、世の諺に、かひ犬の、いたつけるものを、鷹にしも、取られにけりと、語りつき、いひつかへるを、人みなは、知りてあれとも、鷹にあらぬ、鷲に取られし、事ぞくやしき、

聽き畢りて骨冷かに肉動けり。之を久して曰く、謹て命を聽けり、余駑鈍と雖も、學ひの兒達と共に〳〵、甞膽薪薪、其分を盡さん。噫忠孝の道、義勇の志氣、作興振起せずむあるべからず。あはれ道義を天下に扶植せん大任を負へるは余と諸子とにあり。諸子それ勉めよや。

失念をいひとく

田邊和氣子

六月五日發行八十七號の女鑑に。おのれがむかし

活花の師にちかひし言葉を。世のをとめ達の參考にもなれかしとかゝげしに。其年月を去るさゞりしかむ。此頃の事とや見給ふらん。そは明治十とせあまりより。ちかき頃まで。西の都にありけるときの事にそあなる。今更老たる身の。何をか學びものせむ。たゞかつ〴〵知りたる事を。女童にをしへつゝ日を送るのみ。

おもふ事ありけるときの狂歌

行すゑもむかしも今も世の中は
人みるひとのなきぞかなしき

世の中はわからぬことぞ多かりき
むかしも今も今よりものち

雜報

●玉女御降誕　能久親王妃殿下には、いにし五月二十八日、玉の如き王女御降誕あらせられ、御名を擴子と付けさせらる。竹の園生の御榮、いとめでたきことにこそ。

●小松宮妃殿下地方官を召し給ふ　殿下には、いにし十二日午後三時より、當時上京中の各府縣知事を、霞ヶ關なる海軍大臣の官舍に召したまへり。そは、こたび同妃殿下ならびに各宮妃殿下の思召に依り、毛利公爵夫人以下數十名の貴夫人だちか主唱者となり、戰死者の遺族救恤會といふものを設立せられたるにつき、其主旨を廣く知らしめんとの思召にて召させられ、其由を仰せさせ

給ひしなりと承る。今同會の主意書を得たれは左に之を掲けぬ。

去年支那と戰開らけしより、三伏の候、嚴寒の時に際し、凡そ十月餘の間、勇敢忠武なる我陸海の軍隊か、彼の北清の野に屯し、黄海の波に漂ひ、或は瀧なす汗に塗れ、熾くか如き暑さを忍ひ、或は雪を衾とし、氷を枕とし、手足も墜つる寒さに耐へ、身を塵芥よりも輕しとし、義を磐石よりも重しとし、進みて退くを知らす、奮ひ戰ひて倦厭するの樣なく、遂に大捷の功を奏し、國威を海外に輝かし、敵國をして非を悔い和を請はしむるに至り、我大軍凱旋の期も將さに近きにあらんとす。此時に當りて、生きて歸るものは、此上もなき榮譽を擔ひ、到る處稱賛拍手の聲に欵待せられ、朋友知舊は郊に出て迎へ、父母妻子は門に倚りて賀し、其歡ひ想ふべきなり。然るに戰地に於て、名譽の死を遂けし輩(戰死病歿者)に於ては、其報國の忠、死して餘榮あることは云ふを俟たずと雖も、其生きて歸るものに比すれは、全く之と相反して、家門の榮を見るに由なく、其遺族にありては、又父たり子たり夫たるもの、遺す聲譽の高きによりて、僅に憂きを慰むるに過きす。彼の死者の忠節、遺族者の心事を想へは、實に愍然に堪へざるものあり。

之によりて彰仁親王妃殿下を始め參らせ、各親王妃殿下にも、深く茲に御意を悼めさせ給ひ、彼の愍むべき遺族に對し、適當の物品若しくは金員を贈り、其の心を慰め、旁ら死者か國に盡し、義烈の万一に報いんとの思召により、我等同志相謀り主唱者となり、廣く有志の賛同を求め、此の素志を貫かんとす。同情の貴夫人、何とぞ此擧を賛し、應分の金員を醵出あらんことを希ふ。

追て御寄贈金員の取扱は、高崎別當に依頼に及び置き候間、東京府下は來る六月十五日、地方は六月三十日迄に、同氏宛にて駿河臺袋町小松宮御邸に御廻送有之度。尙彼遺族へ寄贈の方法は、主唱者の評議を以て決定次第御報道可致候。將又醵集金額は別紙の振合に付、御參考迄に貴覽に入れ候。尙御送金の節は、御宿所詳細御記載被下度、且つ御一名御寄贈金の最下額は、金五十錢(數名共同の分は總代者の名義を以て送

金の事）と致候、此段申添候也。

●女生徒募集　女子高等師範學校附屬高等女學校及小學校にては、先頃より、本校の修繕にて、教場綜合のため、多數の入學志願者を謝絕せしも、來る七月中には、その修繕終るべきを以て、入學志願者は、同月五日までに、履歷書を差出し、試驗の上、九月一日より入學せしむる由。

●高等女學校の教科書　は文部大臣の撿定を經たるものたるべし。但し未だ文部大臣の撿定を經ざるものを採用するの必要あるときは明治二十八年文部省令第二號に依るべし、又高等女學校の教科用圖書撿定に關しては、明治二十年文部省令第二號教科用圖書撿定規則を適用す、との事を、今度、文部省より訓令せられぬ。

●教員撿定試驗の成蹟　先月中施行されたる尋常師範學校、同中學校、高等女學校の教員撿定試驗は、その志願者八百十一人にて、內女子十九人なりしが、委員の調査によれば、その成蹟、得點者と認むるもの、僅に百六十四人にて、內女子六名あり、右は何れも文部大臣の認可をへて、及第證書を交附するとかや。

尚ほ同試驗のをもなる問題を左に揭げて以て諸孃に示さむ。

第八回尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員撿定試驗問題集

修身、倫理試驗問題

一、徂徠とホッブスとの倫理說の異同を論ぜよ
二、利他主義の根據如何
三、何をか道德の制裁と云ふや
四、苦樂は道德と如何なる關係を有するや

五、人心道心の義を説明せよ
六、論語一貫の義如何
七、墨子兼愛の説如何
八、王陽明知行一致の説とソクラテス知徳合一の説とを比較せよ
九、道徳の觀念に關して今日と維新前と如何なる異同ありや
十、生徒を寄宿せしむることは徳育上如何なる裨益ありや

修身、倫理教授法問題

尋常中學校教員志望者問題

一勅語の公益を廣め世務を開きと云ふことにつき尋常中學校の第五年級の生徒に教授するときの教案を作れ

尋常師範學校教員志望者問題

一勅語の恭儉己れを持しと云ふことにつき尋常小學校の第四年級の生徒に教授するときの教案を作れ

教育學檢定試驗第一回問題

一、觀念の聯合作用を分類して各類に付き其の性質及び發達の事情(Circumstance)を述べよ
二、言語と思想との關係如何
三、他愛は自愛より發達したるものなりとの説あり其の當否を論述せよ
四、意志と知、情、欲望(Desire)及び不隨意運動との區別を一々説明せよ
五、習慣養成に付て必要なる注意を心理學上より説明せよ
六、ヘルバルト心理學の特有なる點は如何
七、思想の三大法と三段論法の規則との關係如何
八、二重體論式(Dilemma)の一例を作り幷に之に對する抗答を附せよ

教育學檢定試驗第二回問題

一、維新以來教育の沿革の大要を記述せよ
一、教育は自然に順ふべしと云ふことに就きて諸大家の意見を擧げて之を評說せよ
一、教科統一を必要とせる教育家の論據如何
一、五段教授法の心理學的基礎を述べ併せて其の實地應用上注意すべき事項を記せ
一、教育上賞與を用ふるの利害如何
一、現時我國の中小學校に於て行はるゝ教育の方法に就きて改良を要すべき事項あらは之れを説述せよ

教育學檢定試驗第三回問題

一、尋常師範學校に於て教育科を授くる方法如何
一、尋常小學校第四學年の生徒に授くべき記事文一則を作り之を授くる目的、方法、及び教授に要する時間を詳記せよ
一、小學校に於て始めて分數を授くるに用ふる詳細なる教案を作れ

國語(解釋)

(一)野分の又の日ころ、いみじうあはれにおぼゆれ。たてじとみ、すいがいなどのふしなみたるに、せんざいども心ぐるしげなり。おほきなる木どもたふれ、枝などふき折られたるだにをしきに、萩女郎花などのうへによろぼひはひふせる、いとおもはずなり。かうしのつぼなどに、さときはをことさらにしたらんやうに、こまごまと吹入たるころ、あらかりつる風のしわざともおぼえね。

(二)曉たよりありときゝて、よもすがらかきゐて都の文どもかく中に、ことに隔なくあはれにたのみかはしたるあね君に、をさなき人々の事さまざまにかきやるほど、れいの浪風はげしく聞ゆれど、たゞ今あるまゝの事をぞ書きつけゝる。

夜もすがら涙もふみもかきあへず
　磯こす風にひとりおきゐて

又同じさまにて、古郷には戀ひしのぶおとうとの尼上にもふみたてまつるとて、いうものなどのはしはしも、いさゝかつゝみあはせて、

　いたつらにめかりしほやくすさびにも
　　戀しやなれし里のあま人

(三)(い)さりとてはた、身をゑうなき物にはふらかしはづべきにしもあらず。かくのみつたなくおろかなる心ながら、何わざにまれ、怠りなくわざと心にいれてつとめたらんに、つひにはひとつゆゑつけて、なのめにしいづるふしも、などかはなからむと、あいだのみにかゝりてなむ。

(ろ)さうざうし。ゆふけ。ゆふげ。ろどろどし。わくらはに、らうたし、らうがはし。さくじる。みづはぐむ。はうけづく。

(四)文章二篇を朗讀し受驗者をして書取らしめ漢字には一々假名を施さしむ

　朗讀の文左の如し

(い)我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある昔神武天皇躬づから大伴物部の兵どもを率

ゐ中國のまつろはぬものどもを討ち平げ給ひし高御坐に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有餘年を歷ぬ此間世の樣の移り換はるに隨ひて兵制の沿革も亦屢々なりき

(ろ)朕幼くして天津日嗣を受けし初め征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を經ずして海內一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歷世祖宗の專蒼生を憐れみ給ひし御遺澤なりといへども併し我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるが故にこそあれ

國語(設問)

一、動詞自他の辨

二、テニヲハの定義を與へ、かつ其分類を示せ

三、維新以前の有名なる國語學者三名を擧げ、ろの略傳と學說の一班とを記せ

四、平安、室町、江戶各時代敎學の特質を略叙せよ

作文

戰死者の遺族に與ふる書

國語敎授の要旨

國語敎授法問題

第一、作文の採點は如何なる標準に據るべきか

第二、讀方敎授の方法及び其目的

第三、讀書科と作文科とは如何にして聯結せしむべきか

第四、尋常師範學校、尋常中學校、高等中學校の國語科時間を各々四學年間每週四時と見做し學科目及び敎科用書の配當表を作るべし

(受驗者は第一第二第三の三問の中其二を撰ぶことを得)

漢文科(解釋第一)

尙書

禹曰俞哉帝光天之下至于海隅蒼生萬邦黎獻共惟帝臣惟帝時擧敷納以言明庶以功車服以康誰敢不讓敢不敬應帝不時敷同日奏罔功

(解釋第二)

國語

夫民勞則思思則善心生逸則淫淫則忘善忘善則惡心生沃土之民不材淫也瘠土之民莫不嚮義勞也是故天子大采朝日與三公九卿祖識地德日中考政與百官之政事師尹惟旅牧相宣序民事少采夕月與太史司載糾虔天刑日入監九御使潔奉禘郊之粢盛而後卽安諸侯朝修天子之業命晝考其國職夕省其典刑夜儆百工無慆淫而後卽安卿大夫朝考其職晝講其庶政夕序其業

夜旰其家事而後卽安士朝而受業晝而講貫夕而習復夜而計過無憾而後卽安自庶人以下明而動晦而休無日以怠

作文

有文事者必有武備説

明治二十八年教員檢定試驗問題

和文英譯

一、父は稚き時よりして榮燿榮華に打ちなれて殊には勇々敷武官の職さへ勤めたり

二、彼は戸口に停み煙草を燻らし憂さうち拂ふ風情なり

三、此子はや自然の美質を顯し些も我儘なる振舞なく喜んで玩弄物などを他の子供に分け與へたり

四、人も親しからぬ内は全く他人なれども心を打明け親しく交はる時は愛情互に深くなり兄弟姉妹にも劣らぬものなり

五、和田守菊次郎氏が獄中にて發明せる新記臆術は既に數ヶ所に於て講話を試みしが近來頗る學者間の一問題となりて同氏は去る三十日哲學會例月會の招待を受け文科大學講堂に於て記臆術の實驗及び之に關する講話を爲したる由

（未完）

●保姆講習所　府下にては、目下兒童の教育に必要なる保姆の尠きを以て、教育家中の有志者は、これを憂ひ、東京教育會へ建議するもの續々あるにつき、同會は今度ろの設置の方法に關し、商議員會を開くとかいふ。

●教育談話會場　京都府教育會か、勸業博覽會開會中、圓山公園假事務所内に開きたる教育談話會場は同會より、毎日委員を出張せしめ居る由なるか、博覽會見物の爲めに、來京したる各地方の教育家は、大抵來場し、同場に備へ置ける、各種の教育成蹟表、調査書類等を閲覧し、大に便益を得るとなむ。

●小學校の豫備病院見舞　府下深川區代用大谷

小學校有志者は、陸軍豫備病院患者慰問の爲め、去る九日午後病院に至り、慰問狀に若干の菓子料を添ひて差出したり。

●朝鮮の女學生　朝鮮の留學生(男子)數百名は先頃より、東京なる慶應義塾に入學し居れるが、今回また同國の女學生もきたれり、共に我邦の文明教育をうくるとぞ。皇國の光ります〳〵、世界にかゞやく。

●善き忠告　京都に開會したる、帝國教育大會において、繪入新聞の記事中に、社會教育の上の風紀を害ふこと少なからざるに付、此の後はなるべく、かゝる文字を除き、德義の奬勵となるべきものを記載せられたしとの事を決議し、不日一篇の忠告書を草して、各繪入新聞に贈るといふ。

●初等教育研究會　かつて設立の計畫ありしが、この程、京都に開ける教育大會の結果、いよいよ設立する事となり、諸般の準備すでに成れるにより、近日これを世に公けにする由、その研究事項を左に大別すれば

一教授、管理、訓練及校務に關する事項
一初等教育に關する論說或は方案
一初等教育の質疑、應答に關する事項
一初等教育に關する外國教育學者の學說
一初等教育に關する教育家の傳記逸事肖像等
一幼兒保育に關する事項
一初等教育の調査報告に關する事項
一初等教育に關する內外大家の意見

●可憐の兒童猛將を泣かしむ　過日第一師團凱

旋の途次、滊車の國府津驛に停るや。七八歳より十二三歳までの小學生徒數百名、數旒の旗を押立て、同停車場前に整列し、歡迎の有志者が山地將軍萬歳を三呼すると同時に、捧銃の禮式をなして一齊に敬意を表したるに、豪猛なる獨眼龍將軍も流石に深く感激したる模樣にて、眼中淚をたゝへ無量の温言を以て、「帝國未來の貔貅よ。今に卿等が出軍して凱旋するの曉には余輩亦今日の如く盛んに歡迎すべし」と慰諭奬勵し、感極まりて殆んど飮泣したりぞ。

●孝女　神奈川縣下橘樹郡田島村字戸田村農田邊初五郎の長女とよ(十七)は、妹四人ある中にも、一人は未だ乳呑子なるより、兎角姉の厄介多き處母は先頃眼病に罹り、渡田より二里餘り隔たれる鶴見と云へる所の醫院に入院せしかど、とよは母の後を引受け、家内の事何くれとなく自ら働き、間には遺されし乳呑子の傅までなし、終日父の助けとなりし上、夜に入れど又幼子を背負ひ、家とても無き松並木の一筋道を、少き女子の身の怖れ氣も無く、母を想ふ一念に雨風も物ともせず、病院まで通ひ、晝の疲れも知らぬ樣に終夜病める母の看護に怠らず、空白む頃漸く其處を立出で、家に歸れど暫し睡む程もありやなし、又も家事の勤めに勵み居れりと云ふ感ずべきかな。

●小笠原島敎育の現況　同島は戸數五百八十四戸、人口三千四百八人なるが、學齡兒童の數四百二十七人中、就學者三百四十三人にて、百人に付七十四人五一の割合なり、之れを内地の（一昨年

い調査）學齢兒童百人に付五十六人二三に比するに、同島の小學教育寧ろ大に發達せりと謂ふべし、蓋し其の原因は、同島の住民は多くは八丈島等より移住し、目に一丁字なき者なるより、却て子弟の教育の必要を感じたると、同島小學教育費として國庫より年々凡そ七百圓の補助を爲し、別に授業料等を徵收せざるとに由る。

●忠勇者と烈女　埼玉縣入間郡入間川村の志村忠五郎と云ふ人は、幼にして父母を失ひ、辛苦の中に人と成り、明治十九年中、女房おかねを迎へ取り、農業を以て世を渡りぬ、同二十年中徵兵檢査に合格し、第一師團第一聯隊第六中隊に編せられ、間もなく一等卒に昇進せり、夫より三年の現役を了り、二十三年十一月歸鄕せしが、在營中職務を勵み、精勤證書、射的賞狀幷びに善行證等を附與せられしにつき、村民之を賞して氏に贈るに多くの慰勞金を以てしたり、氏は之を以て田地を購ひ、熱心に養蠶の業を務めゐたり、昨年征淸の事起るや、氏は淸國の無狀を憤ほり、人に語るに膺懲の已むを得ざるを以てせり、既にして宣戰の詔勅となり、次で九月三十日を以て、豫備後備とも召集せらるゝや、氏は鍬を捨てゝ旅裝を調へ、妻子を隣人に委ね、時こそ來れと勇み進んで入營せり、人以て壯とす、然るに氏の妻女おかねは、元と德川家恩顧の侍士にて、筋目正しき家の娘にして、父は維新の際東叡山に楯籠り、遂に討死を爲したるのち、遺族の人々ちり／＼となり、おかねは八歲の時埼玉縣高麗郡川崎村の細田某に養

はれ、律の中には育ちしも、生來武士の氣質を受け、常に人倫五常をゆるかせにせず、夫婦の中に擧けたる二人の娘を嚴しく躾け、行末人らしきものに育て上んと、寸時も心は許さゞりけり、忠五郎氏出征の後は、彌々其の貞烈なる氣象を顯はして、家事を一手に引き受け、氏をして毫も內顧の憂ひなからしめたるが、後ち遂に綠りの髮を根より切り取りて、尼法師とさまを變へ、一心不亂に佛を念じ、あはれ我軍をして全局の勝利を得せしめ給へ、我が夫をして恙なく凱旋せしめ給へと、朝夕祈念を爲しけるにぞ、村の人々誰とて其の志ざしの殊勝なるを感せざるなく、我も〳〵と訪ひ寄りて、絕ずかね女を慰めをるよし、哀れにいみじき人にぞありける。

●虎列刺病　本年は不幸にも虎列刺病の流行せんとする樣子なり、既に其災に罹りしもの二千人におよふ。誰も誰もよく衛生に注意すへきなり。

府縣名	六月七日正午より十四日正午迄 患者	六月七日正午より十四日正午迄 死亡	本年初發より六月十四日正午迄 患者	本年初發より六月十四日正午迄 死亡
東京	十二人	五人	二十六人	十人
京都	五人	〇	二十二人	十人
大坂	八十九人	〇	二百十七人	六十一人
兵庫	二十七人	八人	百十六人	五十七人
長崎	三人	一人	四人	二人
千葉	〇	〇	一人	〇
栃木	一人	一人	一人	一人
群馬	一人	一人	一人	一人
奈良	二人	〇	四人	二人
愛知	〇	一人	一人	一人
青森	一人	一人	一人	一人
島根	一人	〇	四人	一人
岡山	十四人	一人	三十四人	十七人
廣島	七十六人	〇	四百十三人	二百二十一人
山口	十二人	九人	百九十九人	百十七人
和歌山	三人	〇	六人	三人
香川	四人	一人	十四人	八人
愛媛	三人	〇	二十八人	十五人
高知	〇	〇	十三人	七人

福岡	六十一人	〇	二百卅九人	六十五人
大分	一人	〇	五人	二人
佐賀	五人	一人	五人	一人
熊本	一人	〇	十一人	五人
宮崎	〇	〇	一人	一人
似島檢疫	三人	五人	八人	五人
彦島檢疫	二人	二人	二人	二人
門司停留舍	〇	〇	六人	一人
計	三百二十七人	三十七人	千三百八十二人	六百二十二人

●旭日に匂ふ山櫻

とは野津大將が、榊原工兵大佐をして作らしめたる軍歌なり、其歌にいはく

山櫻

旭日に匂ふ山櫻。散るも散らぬも君が爲。
今年の春の夜嵐に。惜からぬ身を長らへて。
時をまつ間の誠心は。又た來ん春の色に見よ。

●受賞者

三重縣名張郡錦生村井上鹿藏妻
みと

婚嫁以來、孝貞にして姑さと久しく病に臥し、身體不隨、坐臥自由ならさるに當り、日夜侍養、至誠承歡、十年一日の如く、又夫の兄及某妻に敬事し、親和の情藹然として、一郷其德を稱す、其行、洵に奇特とす。仍て其賞として金三圓を下賜す。

石見國邇摩郡大濱村幸太郎次女
小川すみ

平素父母に孝養を竭し、明治二十年、父、病に罹り、家業を廢するに至るや。日夜精勵、力役に服し、兩親をして心を家計に勞せしめざること、玆に數年。洵に奇特とす。仍て其賞として金一圓下賜す。

靜岡縣志太郡笠間村粂吉妻
ろの

明治二十七年十二月二十五日、同郡稻葉村伊久美國吉家宅失火の節、同人長女はまの焰烟中に在りて、死に瀕するを認め、自己の危難を顧みす、之を救濟す、其行爲洵に奇特とす。仍て其賞として金五圓下賜す。

新潟縣刈羽郡相崎町藤田定五郎妻
大橋ちい

資性温柔にして、明治二十三年其夫に隨ひ、東

京に出稼するに當り、實母暫て中風症に罹り、荏苒病褥に在るも、家に侍養者なく、加之赤貧洗ふか如くなるを以て、憂慮措く能はざりしに、同二十六年中、病勢危篤の報に接するや、倉皇歸省、爾來日夜牀褥に侍し、藥餌の料、生計の資、悉く看護の餘力を以て、之を經理する等、其行爲詢に奇特とす、仍て其賞として金一圓下賜す。

新潟縣中蒲原郡山潟村小林圭吉妻

小林ちん

資性温良にして貞淑、其夫嘗て神系病に罹り、就褥二十六年の久しき、加ふるに舅姑前後相踵きて病沒す。其間看護療養に力を竭し、殆と寢食を廢するに至る。既にして嗣子恒敏早世し、孫つね亦多病にして夭折す。是に於てか、遺孤煢々、悲慘の境に遭逢せりと雖も、毫も屈撓せす、專ら遺産を整理し、末孫けいを撫育して、家名再興を圖り、傍ら村内の子弟を教育する等、歸家以來、茲に四十有餘年、備に苦楚を嘗め、操行一日の如し。洵に奇特とす。仍て其賞として木杯一個下賜す。

●**口畫**は。本年四月二十八日、御用船宇品丸が、大連灣より、日本赤十字社救護員等を載せて、皮子窩に至る途中に於いて、暗礁に乗り上げ、殊に雨風さへ加はりて浪荒く、今や沈没せんとするに臨み、赤十字社の救護員か、ボートに乗りて避難する慘状を描きしものなり。其の上の小さき圈の内なる畫は、救護員の清國の平島を發見して、之に漕ぎ付けんとするに、同船員のさきにのがれつきたるものありて、陸上より、之を招く處なり。この時の救護員のよろこびは、如何許なりけん、この後救ひ船にて、皆、無事に皮子窩に送られ、ろれより程經て、歸國したり。今、この圖を得たれば、之を卷の首にかゝげぬ。

教の庭

六月廿日兼題　夏夜

（天地人の外は原稿到着順なり）

天

みどり子をふさせて明日の營みを
　いざといふ間にあくる夏の夜

三河國寶飯郡睦美村大字牧野　鈴木美惠子

地

暮るるかと思へはあくる夏の夜は
　わたる間もなしゆめのうき橋

大坂市北區相生町百六十二番地　梶井久子

人

ほとゝぎすまては水雞も音つれて
　夏はよすかられられさりけり

松山市松前町一丁目三十五番戸　荒瀬ふさ子

人

蚊やりたくけぶりうすれて月影も
　さやかになれる夜半の涼しさ

千葉縣佐倉　植木鋼子

ひるのまの暑さわすれて涼しさに
　おもはすふかす夏の夜半かな　諏訪晴子

ふしわびてぬれてのころの短夜は
　みしかき夢もむすばざりけり　高野辰子

夏の夜は夢のなかばに明けはてゝ
　飛鳥のやまにからすなくなり　廣瀬幾久子

短しとつねにかこちしなつの夜を
　あかしかぬるは老のこのごろ　丸山須磨子

やまのはを出でしと見れば立待の
　つきかげうすしなつの短夜　牧野幸子

芝の浦おきにかゞりのかげ見えて
　たもとすゞしき夏の夜半かな　近山まつ子

涼みしてふるくも知らぬ夏の夜は
　ねやへもいらず明るしのゝめ　香川彰子

涼みつゝ暫しまどろむほどもなく　名取正代子
はや明がたのかねぞきこゆる

たちまちに更れどあけて夏の夜は　太田　貞子
浅きゆめさへ見られざりけり

はしゐしてつきわかりねの手枕に　六　原　子
みじかき夢もなほのこるらん

端ゐして涼しきまゝのうたゝねに　宇多田楊子
ほどなく明くる夏の夜のそら

遠近にひとこゑすなりつきみつゝ　毛受　重子
涼みかてらに夜をあかすらん

端居して月ながむれどゆめだにも　大海原芳子
むすぶ程なきなつのみじか夜

短夜のゆめながらきくほとゝぎす　松下かし子
あくるもをしき夏のそらかな

夕涼みとひ來てかたるひまもなし　大谷津琴子
くるれど明くる夏のみじか夜

夕涼みかぜまち居れどおもひきや　矢野　高子
はやなかぞらに月はのぼりぬ

日くらしの聲をきゝつと思ふ間に　清水　良子
はやなかぞらにおはぐ月かな

秋の庭

夕暮のかひのたきさし絶ぬまに　久門利恵子
はやあけわたるみじか夜の空

ゆめもまた見はてぬ程に夏の夜の　三原　照子
早明けぬとてからすなくなり

おもしろき夏の夜半かな月のころ　久松せい子
雨のふるころほたるとぶころ

尋ねこしふるさと人のうれしさに　土屋ひろ子
語るもつきぬなつのみじか夜

夕風にたもと吹かせてすゝむ間に　吉本　春子
はや明初むるしのゝめのそら

吹くかぜにつゆはこぼれて螢とる　師岡千代子
夜こそなつはすゞしかりけれ

水雞なきほたるとびかひ月すみて　千賀　茂子
夏はよるこそいのちなりけれ

夜もすがら夢にも夏はやりみづの　田中りん子
音きくやどはすゞしかりける

ゆふだちのなごりの露の玉てとこ　雄久保美智子
涼しくつきのやどるなつの夜

端居してすゞまぬ人はなかりけり　林　久子
あつさにたつぬ夏のよな〳〵

暫しかく風まちなからうたゝねの　廣田とめ子
夢のなかむにおくるしのゝめ

なつの夜は扇のつまをたのみにて　山崎すへ子
みじかき夢をむすびつるかな

吹風のすゞしきまゝにはしゐして　内田はる子
思はずふかすなつの夜半かな

たえ兼し暑さなりせむ夜半とても　内田たけ子
いざやとふべし思ふともどち

月かげのねやにさすかと思ひしは　山内かく子
はやみじか夜の白むなりけり

やり水にほたるの飛もうつろひて　山内てる子
なつは夜ころをかしかりけれ

吹風のすゝしきまゝにはし居りて　内田はる子
ねむるともなくおくる夏の夜

五月廿日兼題　暑中見舞の文

天　東京芝區三田四國町　師岡千代子

昨夜の一村雨は水分の神の御助よと思ふ間もなくまた晴れわたりし空の今は中々に堪へがたき暑になむ金をも鎖かすとかいふらん三伏の頃はさる物から伏屋の内のくるしさは甑の中に蒸さるゝ心地し侍るを廣う清らなる御住居とはいへ夏しらぬ御本國より初めて移り住ませ給へる御身にはいかむかりうち惱ませ給ふらんいとおぼつかなきまゝに御けしき承り侍り萬は此暑のすこし打撓みたらむ夕つ方にも親しく候ひてとて先はこの事のみなむわなかしこ

地　千葉縣佐倉　植木鋼子

ふり暮しぬる五月雨のやう〳〵晴ぬと思ふ間にふじの嶺の雪もとくといふ水無月のころとはなり侍りぬいかにして此頃は過させ給ふらん照る日かしこき燃には前栽の草花などはと〳〵しをれ果て地にふし絕々なる庭のやり水も打ぬるむ計りにてひめもす打も置かぬ扇の風を命と賴み草柴にあらぬ身も朝夕のみわづかにいきかへりたる心地のせられ侍りわはれつかの間も暇なきしげきつとめて

おはする御身の日ましけるとし給はぬやうもはら心し給へかしおのれもかげながらこれのみ祈り參らするになむかしこ

人

山梨縣甲府市
山田町　名取　正代

きのふけふのあつさ實にこがねもとけんむかりといひけんやうにていとゞ堪へがたく侍るを御まへにはいかにすごさせ給ふらんゆるうひろやかに御すまひしたまへむおのづからすがすがしう渡らせ給ふらめとおもふたまふれど賤がふせ屋なんどは常だに所せくいぶせきをまして此ぼどのあつさにはほと〳〵こうじはて侍りされは庭もせに茂る草木のしをるゝさまを見てもあはれ一夕立もがなと日毎にいひくらし侍りぬさて此赤葡萄酒一瓶わらはがこゝろのほどでらんせさするになん夕涼みのをりなどの料にもろなへさせ給はゞこよなふうれしうなんかしこ

太田　貞子

土をさくべき此頃のあつさ如何過ごさせ給ふや其後は鵑の音づれもたえて久しく成り侍れど御よすがをさへ露承りきこえぬを定めて御たしなみの言葉の林もおりたち敷島のおくかをやきはめたまふらんと思ふにつけてもいとゞ戀しさの立ちまさりてなむされど御わたりの御住居都のちまためし侍れど騒がしき馬車の音に結びあへぬ夢をさまされうづまく塵の烟りには心ゆく夕涼みも中〳〵にむせびの種とも成りたまふらむとおもふうに比べては此の山住の身のいとゞほのめかるゝ事になんまして夏ふかく成り侍へりしより木立をぐらく茂りありて夏しらぬ住家となりあり水の音涼しうすみわたりて秋立つ心地さへせらるゝを如何君が御すさびの心養ひにもなり侍らむを避暑がてら折しはさ取〳〵なるをゆめ衛生の道をこたらせたまはぬ樣ひたすらに祈り奉るになむ先は暑さ見舞の一はしをかくなむあなかしこ

香川　穎子

日頃うらやましとのみおもひきこえし山里の御住

居もけふ此頃のあつさにはなほ堪へがたうやおはすらんさらでもいぶせき伏屋の中はいとゞ身もわつかはしくて庭の草木ともろともにいかで一村雨もがなと朝な夕なにまちわびてなんさむれ御もとには御二方をはじめ幼き君たちにも打揃ひてつゝみなう物したまふらんやいかに〳〵ときのふけふのあつさのいとおぼつかなさにはふつたの拙き筆もて御有様うかゞひまつるになんあなかしこ

梶井　久子

土さへ裂くといふも實にことわりとればねていとたへがたきは此の頃の暑さなりやいぶせき伏庵には朝夕扇の風をのみたのもし人にてすぐし侍れど池の面もひろらかに庭の木立もいと涼しくすまひなしたまふ御わたりは吹き通ふ風の心もただならざめれむ世の外にやとうらやましうころいでや折につけたるとぶらひでときこねわげたてまつらんと何の涼しげもなき物ながらここにものせしさらし布二卷御めしつかひ人などの料にもとてまゐらするになんなほ〳〵あつさもつよくわしき病なども世にもてなやめむ御身はさらにもいはずいわけなき方々をよく〳〵かしづかせたまへかし

宇多田やう子

夏深きゑるしとて今頃の土もさけ草もかるゝはかりの暑にはやり水のあるは若葉の下などに日を送るさへいと凌きかたく侍りぬされは處せき都に住ひ給ふ君には如何に暮させ給ふらんさころ堪へがたくにはすらめみけゑきのほどきかまほしうなむ伺申上るもこと〳〵しけれど日殊にまさる暑には返す返すも御身のほど大切に御心を用ひたまへかしと祈りたてまつるになんかしこ

降田　槇子

こがねをとかす暑さとは此頃のことをや申すらんげに草も木も枯となんむかりのあつさに侍るを如何過させ給ふらんされど御住居はいと廣く風のがよひよければいかに涼しからんと推しはかられ侍りこゝには皆々かはりなく暮し居侍りぬ例のわろろしき病かしこゝにはやるといふ事は聞きつれどこゝらわたりには先少なく御互によろこむしき

限になんさて此氷菓子いとさゝやかに侍れど贈りまゐらするをひる間の御ねざめにきこし給はゞいとうれしうなんあなかしこや

青木　春子

暑さのいみじきは年ごとの例には侍れど今年は近年になくてりはたゝきていとたへがたきをいかゞすぐさせ給ふらんあはれ御住居の程はゆほびかに廣う住みなし給へど夏をもよろになしたまふらめどすまひの處せまきにはゞかることとなく日影さし入りて心まで黒う焼れん巳がくるしさをきこえあげて一村雨と共に御かへりごとまちたてまつるになんかしこ

雄久保美智子

ろらにはたなびける雲もなく梢も動かぬ水無月の此頃を如何に凌がせ給ふらんこの日頃は事にまぎれて御左右も承り侍らぬをいつもの廣き御心もて免させ給ひてよこなたにはみな／＼かはることとなくうちすぐしはべれど御心にかけ給ひそこぞ御目もじの時わくる年は熱海あたりにものし侍らん

と申かわせしがはからぬ事は思はぬ時にいづるとかや知召如くいにし年よりからくにとの結びて解けぬ御いくさいかになりゆくらんと心も心ならずなん日頃あつさのたゑかぬるごとに彼の國にある軍さ人等如何ならんと思ひやりては中々に堪へがたきも忘れ果て侍りぬ又こん年にこそ御供し侍らん此の扇子きのふさる人より送られ侍りしが獨りにて涼しさむかふるもげにうすし御もとへも奉るをあつさ凌ぎかたからんをり手ならしたまはゞいと／＼うれしうになん

七月兼題

五日
- 歌……遂
- 文……靈祭の詞

二十日
- 歌……夕立
- 文……海水浴

社告

本誌編輯上、都合有之候間、左の三回に限り、締切日限迄に、兼題原稿、御送附相成度候

八月五日の分は　七月廿五日締切

八月廿日の分は　八月十日締切

九月五日の分は　八月廿五日締切

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事　○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし　若强ひて領收證を要せらるゝ方は　別に證書郵送料御送附の事　○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年六月十九日印刷
同　年六月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根男藏
同
發行所（電話番號一九四六）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

（明治二十四年八月八日內務省認可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）